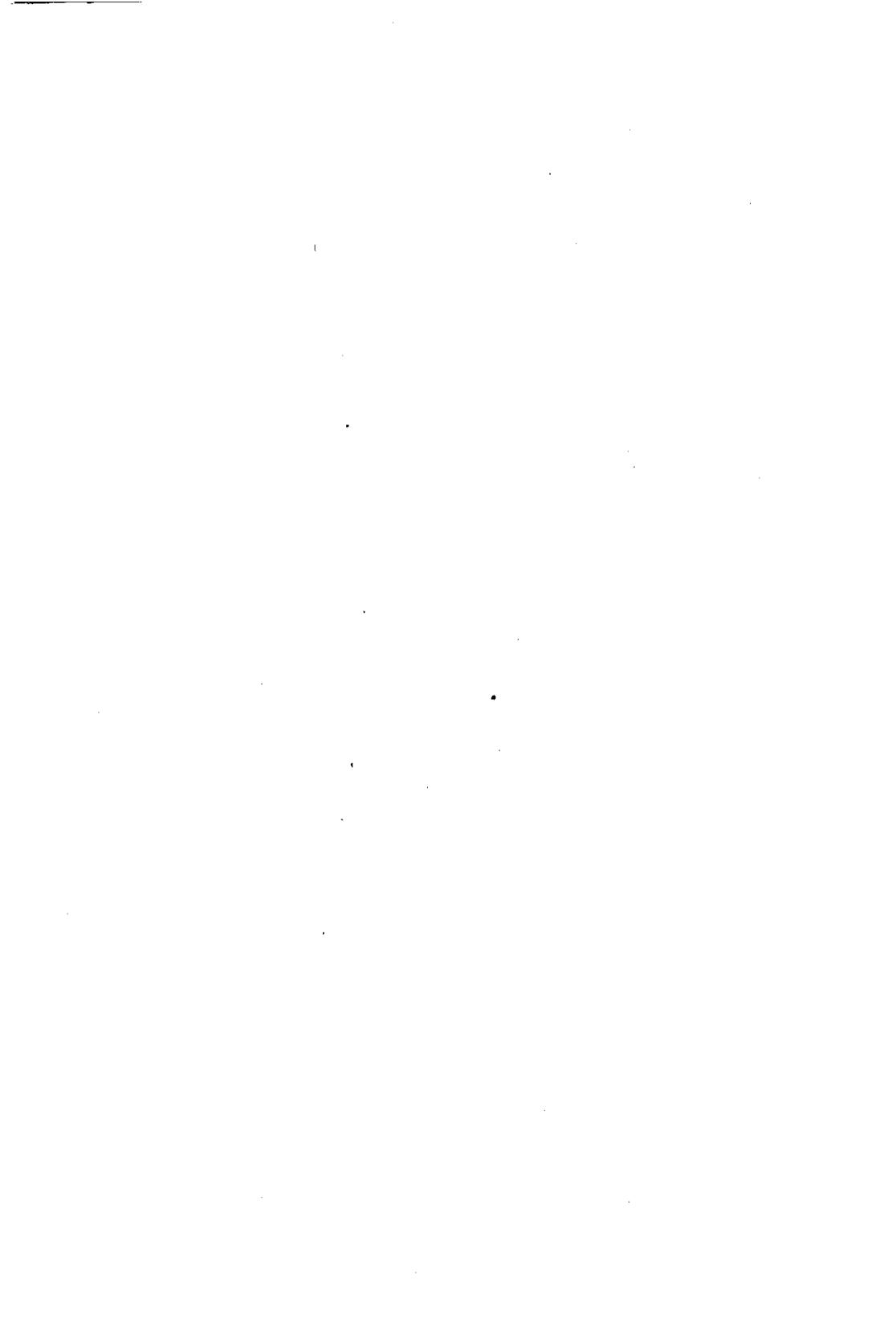


路綏寧黃氏書

竹山逸人高忠周題簽





語學叢書第一篇目錄

文字反

一葉

假名文字遣

一卷

附 定家卿口傳 人丸秘抄

下官集

一卷

和字正濫鈔

五卷

和字正濫要略

一卷

「語學叢書」の題字ハ古篆家高田忠周氏が殷周古器の眞拓本に擬して揮毫せられし者にて三代の古文ハ如此と云ふ。尙本叢書の題字ハ每篇字體をかへ所謂漢字の八體及和様の數體をも知らしむべし。

「和字正濫鈔」の題字ハ古版の同書第五卷題字をとりし者にてもと契沖師の自筆にかゝる。

「假名文字道、下宮集」及「和字正濫鈔」の題字ハ小杉樞郎翁が筆也。

表紙背の題字ハ中根牛嶺氏の筆也

凡例

此叢書の、凡て原書の眞面目を最も正確に維持せむことを期し、及ぶべき限り善本を
あつめて對比校訂す。されば一點一畫といへども忽にせず、古字・俗字・省字或の
誤字・脱字等の如きも、縦に改竄補正を加へざるを旨とす。而して之が爲に、活字
になきものゝ大抵木版を調製せしめしを以て、其數實に夥しく、發行書肆及び印刷
所の勞思ふべし。然れども、元來、點畫の一定せる活字を以て、點畫不定の古書を
寫すにあれば、到底毫釐の差なきに至るを得ず。讀者之を諒せよ。

解題

文字反

一葉

梅尾高山寺本

記者詳ならず

文字反、又一に反音と題す。もと高山寺の經藏第五十三の箱にありし品、嘗て故青木信實氏の手に歸し、今ハ某氏の所藏となれり。其紙質書體等によるに、明惠上人の時代を去ること久しからざるもの、實に六百餘年の間、幸に池魚の災に罹らずして、今に存せる珍書なり。其斯學の參考に資すべきハ勿論、從來世に知られざりしにや、先輩の著作のうちにも、この書のとを載せたるを聞かず。盡餘の殘篇、文意の通じがたきとわれども、なほ其大體を知るとを得れば、摸寫してこゝに収めて、同好の士に示し、且永く世に傳へんとす。反音の説、五十音圖の事等につきて論せんとする輩、此書に於て、棄つると能はざるものあるべし。

假名文字遣

附
定家
丸秘抄
傳

解題

假名文字遣 一卷 行阿撰といふ

附 定家卿口傳 人丸秘抄

〔一名〕或い定家卿假名遣、或い行阿假名遣、或い二人丸秘抄の名を以て行はる。但し、名物記に、定家卿自筆假名遣の巻物と見えたるい、別のものなり。其事次にあぐる下官集の條にいふ。

又、附録の定家卿口傳と、前にいふ定家卿假名遣とい異にして、人丸秘抄と二人丸秘抄とも同じからず。それらのと、なほ下にいふべし。

〔傳本〕管見の及ぶところ、此書の寫本に二部あり。一い文明の奥書あるものにして即ちこの叢書の校正に用ゐたり。一い文安五年二月廿三日、平常縁、左衛門尉藤原氏保の所望によりて寫して興へしよし奥書あるもの、其本文い文明本にほゞ同じくして、目錄及び附録なし。

刊本にい、貞享・元祿・寛政等の數板、并に刊行の年月を記さるものあり。この刊行の年月なきものい美濃紙本にして、蓋し慶長中の出版、天文の奥書を載す。其

體文明本に似てや、増加の詞あり。且、其附録の除きたれど、目錄に「一定家卿口傳、二人丸秘抄」といふと、なほ残りたり。されば、類字假名遣・群書一覽・其他に、假名文字遣の一名を「二人丸秘抄」といふよしに記せるに、さる附録ありしことを知らず、目錄を讀みあやまりたるより起れるとなり。今この古板本を文明の本によりて校正せり。

貞享、元祿等の板本の、古板本を縮刷して、横本とし、半紙本とし、小本としたるにすぎず。

〔撰者〕序によれば、源親行はじめに之を撰びて、定家卿の校閲をうけ、後に親行の孫行阿、更に増訂したるものか。但し、行阿を親行の孫といふとに、疑なきにあらず。さて、この定家卿(應保二一七治二)小倉百人一首の撰者として世にあまねく知られたる人なり。官正二位權中納言に至る。法名明靜、世に京極中納言といふ。新古今集、新勅撰集の撰に興り、又、詠歌大概・毎月鈔・顯注密勘・明月記・拾遺愚草等の著あり。

拾遺愚草の、建暦元年(一八七一)九月八日より、建保四年(一八七六)三月廿八日まで侍従たりし間に成りしものならん。拾遺の、侍従の唐名によりたりと見ゆれば

なり。されば、假名文字遣の序にいへる拾遺愚草の清書も、又其頃のとなるべし。これによりて、はゞ此書の成りたる時代を知るべきか。

親行(一八九五)(一建長七)大和源氏にして、河内守光行の子、官、從五位下・式部丞・河内守たり。父光行の業をつぎて、中古の文學に通じ、和歌を好み、其詠、續後撰集等に入る。仁治三年鎌倉に下り、東關紀行の作あり。

行阿、假名文字遣の序に「祖父河内前司親行」とあるを、行阿より指していふ詞として、世に親行の孫と見なさるゝと久しく、後普光園院(良基公)假名遣の抄といふものにも「後二條・後嵯峨・後深草三代の帝に仕へし人にて、親行の孫也」と見たり。この後二條とあるは四條にや。後二條天皇は、後深草天皇より四十餘年後なり。又、後嵯峨、後深草の御代に仕へしならば、親行と同時代なり。孫と祖父と同時代に仕へしと、いかゞあらん。按ずるに、行阿撰といふもの、別に原中最秘抄あり。其文中に「亡父光行」とみゆ。これによれば、行阿は光行の子なり。光行の子、系圖に、親行の他に、光重・孝行・宣行・仲行等ありて、誰が行阿といふ法名つきしか詳ならねど、もしくは親行にてあるまじきか。假名文字遣の序に親行の孫某の記したるものにて、祖父のとを諱にてもいひ、唐名にてもあるし、又法名にても

書きたるにていなきか。

又、本朝書籍目錄外録水原鈔の條に「親行の定家卿の母方の祖父也。假名遣の作者也」と見ゆれど、是ハ藤原親忠と混じて、あやまりたるなるべし。

行阿といふ親行の孫ありしか。親行の法名を行阿といひしか。別に又、行阿といふ人ありしか。なほ後の致をまつ。

〔提要〕此書、假名遣に關する最古の著作なり。その由來ハ序に見えたるが如し。但し、附録の二書のと、いかなるよしのものか、未詳ならず。

さて、これらの書に用ゐたる、端・中・奥等の名目の、いろはうたによりて名づけたるものにて、其他にも、人丸秘抄に「うるの奥山書之故也」など、いろは歌によりたりと見ゆるとあり。「をそれ」「おそる」「きをひひま」「されふ」「おけ」「こをけ」「おまさ」「をもし」の類、何によりて、かく定めしにや、詳ならず。後のこの書のとをいふもの、四聲の音調によりて、わかちしものといへれど、其よし、この書の中に、慥にみえず。

總じて、此書に載せたるどころ、かなづかひの例を示したるのみにて、其理由をいはざるが故に、全書、親行等の臆斷にて定めたるもの、如くに見なざるれど、恐ら

く然のみにあらず。此書に載せたる詞、すべて、かなづかひを一定せるにあらで、同じ詞を、種々のかなにてあるしたる多し。これらによりておもふに、當時まがひやすきかなを、かきあつめたるものにて、必しも、ことごとく之を取捨してかなづかひを一様に定めんとせざりしものなるべし。さて所謂、定家卿の合點といふもの、いづれに點をかけられしにや。いづれにもせよ疑しきとかな。

「抑於歌道定家を難せん輩の、冥加もあるべからず、罪を蒙るべきとなり」とて、此書もまた、歌學の上にて殊に重せられて、永く世の標準として用ゐられたり。慶長板易林の節用集も、この書によりて假名を正し、かなづかひ近道抄、類字かなづかひ等の末書も、多く成りたり。かの契沖法師の古假名の説いで、のちも、かの學派をくむもの、他の、みなこの書にもとづかざるのなかりき。古假名を主張する人も、其證を得ざるもの、なほこの書によりしと、假名大意抄にいへるおもふきにも知るべし。和字正濫鈔卷五にも「以上依舊假名遣勘酌」と見えたり。

其説のよしあしのもかく、後世に影響せしと、甚廣大なるものといふべし。其中にも「をしふ」「をしへども」「をはる」「りども」「をふ」「をひてども」「なを見わたる」の、やがて語尾の變化の發明のいとぐちとも、なりやまにけん。この書の末書を考

ふるに、かなづかひといふ名の下に語尾の變化を説きて、漸次詳になりしさま見たり。

校訂凡例

- 一 此書の、古板本により、文明本にて校正せり。附録の類本なきによりて、校する
と能はず。
- 一 原本、清濁點、句讀點なし。今、讀者の便をおもひて、かりに之を補ふ。
- 一 文字の大小、或は二行に書き或は傍に記せる類、必しも原本のまゝを存すると能
はず。
- 一 板本と記したるの古板本、一本とあるの文明本なり。
偶々別本を記したる者の文案本なり
- 一 『』の印の一本によりて補ひしもの「」の印の一本になくして板本にあるもの。
- 一 本書後半の、板本と文明本との異同區々にして殆ど校するに堪へず。假名遣并に
文意に深く關せざるものゝ一々記せず。讀者之を諒せよ。

一本遺ノ下ニ事トア

假名文字遣

を・か・ひ・る・へ・ひ・い・井・
ほ・わ・は・む・う・ふ

黄門ハ中納言ノ唐名
定家卿チサス
より一本ニナシ

主爨ハ大炊ノ唐名
親行チサス

之一本ニヨリテガギ
ナフ

京極中納言定家卿家集拾遺愚草の清書を祖父河内前司于
時大炊助親行に誂申されける時、親行申て云、を・れ・え・る・へ・い・
る・ひ等の文字の聲かよひたる誤あるによりて、其字の見
わきがたき事在之、然間、此次をもて、後學のために^{ス・タ・カ}定をか
るべき由、黄門に申處に、われも若か日来「トヨモ」思よりし事
也、さらば主爨が所存の分、書出して進ずべき由、仰られけ
る間、大概如此注進之處、申所^{トモ}悉其理相叶へりさて、則合
點せられ畢。

然者文字遣を^モ定事、親行が抄出是濫觴也。加之、行阿思案『之』
するに、權者の製作として眞名の極草の字を伊呂波に縮
なして、文字の數^{カサ}のすくなきに、い・わ・ひ・中・山・れ・の・る・へ・同讀

のあるにて、いはれ各別の要用につかふべき謂を。

然而、先達の猶書漏されたる事ことある間、是非の迷をひら

かんがために、追て勘かみるのみにもあらず、更に又はわはむ。

う。ふの字等を、あ新たゆしくゑるしをへ畢。其故は、はをに

よまれ、わははにかよふ。むうにまぎる。ふは又うにねな

じきによりて、是等を書分て段々るところとす。殘る所ところの詞等ありし

いへども、是にて准據すべき也。仍子孫等守此勘勅『之趣』を

守て可神秘々々

之趣 一本ニヨリテ補

一本目次、序ノ前

假名文字遣

コノ條ヲ見アヤマリ
テ古來ニ人丸秘抄ト
コノ本ノ異名ヲヨビ
ナセリ、リノコト解題
ニイヘルガゴトシ

一 を 杖をまげ 小 (五頁) 二 ね お於尾鳥 雄呼 (十三)

三 ね 之衣弄柄 縁に得柄 (二十一) 四 ち 務も衛會 營も惠畫 (二十七)

五 へ 邊を遍 經部返人 (三十) 六 ひ 非飛比避肥 非鄙比避肥 (三十六)

七 い 伊已夷意 異吳以怡 (四十三) 八 ろ 井居遠爲委 威園遺謂 (五十五)

九 ほ 不淨保帆補 浦雨茅暮 (六十) 十 わ 輪往話 王和倭 (六十四)

十一 は 端葉半ま頗 端葉半ま頗 (六十六) 十二 む 武死ま夢 無舞半夢 (七十一)

十三 う 羽知得有 羽胡 (七十二) 十四 ふ 布布婦婦 芳府不風 (七十九)

一 端 不 (八十九) 中 を (九十) 奥 お (九十一)

一 端 い (九十二) 中 ろ (九十三) 奥 ひ (九十三)

一 端 へ (八十七) 中 え (八十八) 奥 ち (八十九)

一 定家卿口傳 (八十七) 二 人丸秘抄 (九十五)

一 を緒・拭き 此を也

をみなへし 字 女郎花・女倍芝

をにのちこぐさ 鬼志許草
万葉ニ見

をけら 木 白木・青木

をどろ カラムナシ
棘同 藤

をしね おくての
時ハお也 晚稻

志をん 紫菀

あをかづら 防己 也

はせ茂は 芭蕉葉

たまのを柳 玉緒柳
玉小柳

をそざくら 遅櫻

木のえたをれ 枝折

をかつゝじ 荷 崗羊

くれのをも 壞香

をざゝ 小篠

あさのを 麻苧

をて 於期 海藻也
汚塵

あをのり あおの・砂障
りこし 青苔俗用之

あ茂つゝら 青果・草
青果・草 青果・草

あをやぎ 青柳 又催馬
一名也

をがたまの木 岡玉木
古今集ニアリ

雪の下をれ 雪下折

花をたをる 手折 花を「お」る「の」
時ハお也

砂障、一本ニ「汚塵・汚
塵」ニツクル
青果、一本 青黒葛ニ
ツクル

板本花をたるの時ノ
れトのトナシ

まほりとも板木まほりともニツクル
水消衝石ノ四字板本ニナシ、倉水道一ノ二字一本ニナク別本ニヨリ補フ

●古本板三丁

たをやかなり 蟬娟・菊露

志をりするみち 鹽折・枝折

つゞらをり 九折盤折 文選

みをつくし 櫻標 中本・追衝石

をひかせ 逐風追風

をく露 置露 露なき

をやみなき雨 巾無小止雨

をく 置・措・懸・呼

をか 岳・丘・前・庭

をやまた 小山田 應ヨフトヨム

をこはやま 音羽山

をぐらやま 小倉山

をぐらし 隠・暗・朧 チクラシ

をこはやま 小塩山

をのやま 小野山 そのいほ

をはつせのやま 小長谷山 万葉ニ

いはくらをの 岩倉小野

こ茂さこをの 遠里小野

をぐるす 小栗栖

あをによしなら 青丹吉平

をたぎ 愛岩 愛岩基

をみのうら 小忌浦

をしてるやなにはの浦 於碎泥塵裁難波

押照裁難波万葉

をきなか川 興中河・興長

をこなと川 音無川

季ノチモ同、一本ナ

綾板本緒ニツクル

益雄、一本益ト雄ニツクル
健板本建ニツクル

万ハ万葉集ノ略
博板本傳ニツクル

武士ノ字一本ニナシ
カノ板本カノレニツクル

源氏ニ在之一本ナシ

をたえのはし 緒絶橋

ここのを 綾季緒、筆緒和季

をのく 各各々

まづのを 賤男、婢男、男子、万葉

ますらを 益雄・健男

をうご おまこの時ハお也 夫

をひ 甥・姪男

をば 伯母、内戚、母、姨

をこめ 乙女、童女、なまめ、若子

をもの人 侍従

をし 瘡・瘰

そのが 己之

をそれ おそのの時ハお也 恐・怖・畏

たまのを 玉緒 命名也、季ノチモ同

はこのを 匣緒箱、篋、篋、篋

をのこ おのこ 男

伊勢をのあま 伊勢男仙郎大夫、古今風名序在之

まづのをたまさ 賤小手卷

をぢ 地 伯父 内戚、阿伯、外戚

をこよ おまこの時ハお也 弟

をんな 女

たげやめ 手弱女人、万、婦、徳、毛、詩、婦人

いさをし人 勳功「八」モノ、フ也、求、事、婦功、万葉ニ在之、代イ也

をの 己

をしがいもどあるじ 凡垣下主 源氏物語ニ本

ささのよのをかし 前世侵 ツルツツ心也、源氏ニ在之

●四丁

後、一本綴ニツクル

なこりて板本おこる
トス
なくるノ傍ノれ一本
ニナシ
遣ノ下ノ字、別本ニ
ヨルニ、取ノ誤ナル
ベシ
本定ハ「本ノマ」
ノ誤寫カ

排一本俳トス

みさをつくりて 操作 みさほ

をへさること 不関関・不終

をもれたり なほけ 饑没在

をこなふ 行

をいて 於

をでりて 引 矜奢・驕

くづをる 窮・屈・頹

あをぐ あふぐ 仰・扇

をこづる 奢・驕・侈

もの物にをそはる 蹙蹙・窟窟中

をびゆ 嗚

をにやらひ 儼・追儼事也

をよそ おほよ 凡凡

をのづから 自

をろかなり 愚・恣

をじふ なしへ 教・誨・訓

をくれて 後・終

をこたる 怠・懈・慵 耽

をくる 也 送・贈・遺・晚 テ本定

をのしく 聖怖惶怒

をどる 踊・躍 をどるまゝ

をそふ 襲

をびやかす 劫・排

をどす 威・踈

をに おにさほ 鬼

をぎぬふ 補

をぎのる 貫酒 儀 儀

をよぶ 及 聲 追 追

をそし みそき 遅・晩

をこづれ 音信・音

をふ なひて 追・逐・捉

をす 推駕 ナカハシ

をしひらく 排

な残ざりがてら 等閑

をちこち 地 遠近

をむむき おもむく 時ハおも也 趣

をし 鴛鴦

山鳥のをろのはつお

をそ 獺・獾 ソカハチ

くらをく 鞍鞍・鞍置・被鞍 ヲ

ご残し 遠遼 仇

をそな「は」れり 乞

をはる りこも 終了・畢・訖・卒

をり 坐・居

をしはかり 推量 見とく

をしなべて 押並 小井

をちかへりなけ 百千返鳴也

をちかた 遠方水衣 日本紀 彼方ヲテチカカ

をこり 發 發

をこり 雄

万葉ニ山鳥の雄呂の初尾一説云はつおハこれも雄の字ミ云ハ鳥止事也

をけもの 牡

●五丁

一馬也一本ニナシ

乞一本儀ニツケル

卒一本ニアリ

をむま 牡馬

にをひむま 駄

きをひむま きおふゆ 競馬

をじか 麋・小鹿

をこ 鼠弩

あをさば 鯖

ひを 氷魚『鮎々』

をさこ 鮎 魚也

をほひ 盖・覆

をみの衣 小忌衣 舞人着也

な茂しの衣 襦衣

さびのを 鷄尾車具也 轄小艇様

をふね 艇・小舟

をそむま 鶯

むまうとのをろ 馬牛樊

さ茂しか 牡麋

をこかは 韋・革中

うを いなまも 魚

をこじ 鱒魚

おろいを 鮎魚 中魚也

ひをむこ 蜉蝣 螻蛄 生メタニ死虫也

をり物 綺

な茂し 直衣

つけのをぐし 黄柳小櫓

をぐるま 小車

をもち 錘留・鎮

白魚ノ字 一本ニナシ

おもきの時又お也、
一本ニヨル

●六丁

板本ひしおともニツ
クル

親子別本ニヨル

ほ一本ニアリ

をもち
『おもみの時ハお也』
重軽重也
をくり物なくる
贈

をいで
印・印判
をの 斧・鉞
をの ヲえはおのい
秘・鉞柄

てをの
屬・櫛手斧
をの ヲえはおのい
秘・鉞柄

をいさ
折敷
をき 爐火也
をこいずみ 興炭

をきび火
爐煨タキタル也
をこいずみ 興炭

ひいを
ひしほ
醬・醃
をものおももの 飯

いをもゆ
時ハお也
中・漿
をものおももの 飯

をやこ
ハお也
中・親・主
をこのもの物 鳩・餅・鳴呼

こをけ
只ハおけの
小桶

曉をき
時ハお也
曉起

かたをなみ目
瀉保浪

あをりあふり
隔泥

まど浅の衣 間遠衣

をくり物なくる
贈

をの 斧・鉞
をの ヲえはおのい
秘・鉞柄

をの ヲえはおのい
秘・鉞柄

をき 爐火也

をこいずみ 興炭

をものおももの 飯

をこのもの物 鳩・餅・鳴呼

をほひ 杷ヒ

見山をろと山おろしの時ハお也
深山風下風

た浅す 顛タフル 倒

不不 替也か
たかさごのをのえ 高砂小江目

あひをひ 相生

を^{あき}と明がた 押明方

をろそかなり 踈

をきの^木あて

をよび 指

をのよこまち 小野小町

をりべのつかさ 織部司

かちをん 勝臣 古今集作者

をはりのくに 尾張

をきのくに 隱岐 隠岐

をんあゆつ 恩恤

てにをはのを

かきを かきほ 塙生垣面

むん一本ニヨル板本
あんなん
●セ丁

をさへて 押抑

たをれもの 斃 ヘイスル

をなじ じうな 項頰 しほ

すさのをのみこと 素盞烏尊そさの

をふと河内のみつね 凡河内躬恒

を^ちるて ちなりて 織手

を^ちをたうみの國 遠江國

をんたく 恩澤

あんをむ をん 安穩

を^ち伐 十拾

を^ちはたどころ 大歌所
大嘗會時之大歌所也

「万葉」及「日本紀」
別本ニヨリ補フ

二 ね・尾 お・於 此お也

おほそら 空虚

山のおく 山奥

れくやま 奥山

おほえ山 やま 大江山

あおばの山 葉 青羽山

かめのお 中山 龜尾

ひごお 一筆、万 一尾

おほうみ 溟渤・大海

れふのうら 生浦

おき 興・万葉息
納玉精蘭漬 貞

おほかはのへ 「中息川之邊」

れほろの清水 朧清水・妙美水

雲のみお 雲ノ水尾水ノミチ水尾中葉
水深雷水起水澤水也水泥

山おろしの風 深山風の時ハな也 山下風

おほうちやま 大内山 禁裏名也

れごこ山 男山

ひおのやま 日尾山 大嘗會の時
作鏡山事也

おのへ 尾上

おいそのもり 老曾杜

おほあらしの森 邑樂社
上野名所也

おきつなみ 興津濱
納云々蘭云々

れほる川 大堰川
大井河

おほよどのわたり 大淀渡

おほみづ 洪水

「息川之邊」ノ四字一
本ナシ

さなし一本さおしト

みのおのたき 箕面瀧 ねち瀧つ岩さりごをじ 岩切通

露おもみ おもきの時ハお也 露重 花をおる 花をたむるの時ハお也 折

おとま 胡麻 あさのお あさの 麻苧

●晩稻ノ字一本ニナシ

れくて なしたの 晩田 〔晩稻〕 おほひる 葫蘆

おち葉 落葉 おぎのは 荻葉・濱荻

和名鈔ニハ篠竹トアリ

おほたけ 篠竹 おもひぐさ 思草

菴菜イノ字一本ナシ

れはぼこ 車前草 おほね 菴菜・藤・大根 〔菴菜〕

あおな 葶藶 ねもたか 澤瀉

おきなぐさ 白頭公花 イ おほごち 茶 オホトチ 女郎花ノ色ノ白也

涉風、一本ニヨル
陸、一本涉トス
小花ノ次、一本菱花ニ
ツケル

あおのり あなの 『涉厘』・陟釐 青苔 れはな 蕙芝・小花・菱花・尾花

あしのおばな 蘆蓬 おふる 生 草木也

ニツノ字ノ字一本ニ
ヨル

おいさき 生前生生長記 おほらか 麋・大鹿

おほかみ 狼狽 おひかけ 綏老繫 冠也

おまじ 敷史記 日本紀 藤本云 御寢所也

たちのおびこり 太刀鐸

おもがた 籠 籠具足也

おさ 箴 籠具足也

おんてうと 御調度

漢王之鋌天下欲亂之時者倒臥占中車凶之間名御博士

おほつほ 虎子 尿器也

おんぢやく 温石

おほつかなし 無臚無覺束

おほよそ 大都會

おほかた 大方

おほろけならず 不臚氣

おほけたる 臚

れび ひだちをび の時ハな也 帶紳

おもづら 轍結頭

おけ ハなけの時 桶

おんたらと 御多羅支

おんそかし 御博士

とりかちおもかち 取梶面梶

あおご 青礪石

おこととめ 粧妝興米

おほむね 大概 概オホム子

おはします 御座

おほろけ 臚なり 臚

おほこき 穩 古今序

●九丁

下ノオホム子一本ヲ
ホム子ニツクル

おさノ條ニ一本ヲ
おほのふトイフコ
トマツハント
支板本枝トス

一本なこりおしみて
アリ

一本うちおもふニツ
クル又豫ヲ預ニツク
一本おもはかるニツ
クル
一本おもむみれば

おきわかれ 時をきの 起別

いごおし 最惜 絲惜

きおふ 時をひ馬の 競

おほぢ 祖父

おしむ おしき 惜

なごりおし 名残惜 餘波惜

おりふと 境節・折節

おなじこと 同事

おかし 可咲

れほしく 雄拔 日本紀源氏
物語ニ在

おたろう 穩

おほし おほく 多

おほき也 大

たおやか也 蹉跎 蹉躓

ごおる ごほる 通達・徹

おこする人 おこな

名にしおはゞ 名負 去來言問

伊勢物語ニ在

右近のむまほのひおりの日 引折日

おこになりぬ 鳴呼 伊勢物語

むまをおさへて 推押 押

うらおもふ 猶豫 サダマラザル心也
ウタガフ心也

おもはく おもへ 以爲

おも「ん」はかる 虞慮

おもんみれば 惟以

一本赴ノ字ナシ

●十丁

おもひやる 想像

ものおもひ 襟襟畏

おほごめす 思食

おもねる 阿容阿容興發作阿加起心

おほふ 把把覆覆掩掩蓋蓋

おがむ 拜

おほうる 溺

おそろし 恐懼恐懼慄慄惶惶兢兢
威威鬼鬼長長吟吟

おごしむ 貶貶褒褒減減

れつ 零落

おごろふ 衰

おろく 下下踈踈々

おさむ 治世治世御宇御宇
釐釐修修理理収収納納

おもひおこす 中中思思起起中中

おもふ 思思憶憶想想良良
賜賜念念惟惟

おほせ 仰仰課課役

おもむく 時時ハハなな也也
趣趣中中

おほえる 同上

おふ 負負物物也

およぐ 淤淤泳泳游

れもかけ 典刑典刑面影面影化化

おちふる 落々落々落魄落魄潦倒

れほゆ 覺覺省

くらおろす 稅稅鞍

おびたる 帶帶佩

かきおさむ 摺

人におめて

おごゝひ 一昨日

治同ノ字一本ニナシ
【澤地】已上オサク
シ也

せいぞくごあおやかなり 青簇

あおじ あなし 青・碧・滄

おに おにとも 鬼

おごこ 壯士ヲトナ男ヲトモ 又タケキ

雲おりかゝる 雲下【懸籠】

おひて 負

おほん 御

あひおひ 【あひ】 相生

おきふじ 起居伏

おのゝえ 鉞柄

おごゝと 去々年

れさゝくゝと 優日本紀「替了」同・通事同上禁
制同・長々同【長同】軌制同

おぐとけぶり 御頭梳

れきな 叟翁

おそる 【おそる】 怖畏

おづのお【ごも】 【おづのお】 賤男

おもる 重

おして春雨

水のおも 水面

おりはへて 下榮

およほさん 算

●十一丁

男ノ字一本ニナシ
懸籠ノ二字一本ニヨ
リテオギナフ

高砂尾上ノ傍ニ一本
「小江花」トアリ

おはつて 己

たかさでのおのへ 高砂尾上

れよほぬ はなよぶ時 不及

なにおふ

おのこ なほのこ

おこなしき人 老人

おひぬれば ばおいぬれ 老

およとたつる 生立

おもご人 侍者文集侍醫著
内記局名也

たき木おへる山人 薪負山人

おごがい 願

れごよめ 姉婦

おや木 親子父干

おこ 飯炊 イロカシク

おさ 随分也 サラニト
云事也

おもくさ 面舞

おくして 憶

まおごこ 密夫

おひうと おいら 同上

おひすがふ 老過

おさなき人 稚人少同幼
ヲサナシ神

れちかみ 乱髪 千金方

おうな 嫗名也 老女
名也

お山は 祖母 伯母ニ
ハ非ズ

おさめ 長女 見五節記

おごよひ なごいの
時ハな也 兄弟 おごら
ごも

おほやけ 公

おほぎみ 人王オホキミ・王オホキミ・天皇ニ万葉

おほきみすがた 直衣姿

こおほぎみ 小大君 後拾遺

おほいまうち君 大臣

おほい殿 大臣殿

おほきおほいまうち君 太政大臣

れごゞ 大臣 日本紀

むまほのおごゞ 馬場殿

よるのおごゞ 夜殿

●十二丁

おごゞ 殿

おほさねりれう 大舍人寮

れほいれう 大炊寮

おろし物のつかさ 監物局

たちばき一本たちわ
きトス

れんやうれう 陰陽寮

たかはきのおさ 帯刀長東宮
坊ニ在之

さこのおさ 里肯 文集

そでのたおさ 四重田長・四
手田長万葉

法皇ヲ申ノ字 一本ニ
ナシ

おりたつたを 居立田子

おりるの御門 院 中津皇升

おほいのみかど 大炊御門

おほち 御路 日本紀

おほすみの國 大隅國

おんてき 怨敵

おんおやう 音聲

れうと 擁護

おこる。おほ。おみ。お
 ごとく。おほるす。ノ
 四語一本ナシ。後人ノ
 増加ナルベシ。其おほ
 のみハ前ヨリコ、ニ
 ウツシタルニヤ

れはやまご **大和** 廿二社之内其一也

みのおのてら **箕面寺**

おほがうち **大神氏** 俗人姓也

「おほゆみ **誓山**」

「おほちち **直下**」

三 え・江 垂・枝・縁・衣・え也

おほえやま **大江山**

をたえのはこ **緒断橋**

みづのえの浦 浦島子來し所なり、万葉并後撰在之

えぐち **江口**

ほりえ **堀江**

夏かりの玉えのあと 夏刈玉江 越前名所也

かちおのてら **勝尾寺**

おほなほびの歌 大直比歌神樂曲 古今集ニアリ

「おとち **興發起作**」

「おとち **驚**」

ひえの山 **比叡山**

えなみ **榎並**

なにはえ **難波江**

まのゝ入え **眞野入江**

つくまえの沼 **築間江沼**

●十三丁

假名文字遣

二十一

おほのうらかたえ 生浦片枝

えやのいぶきのさしも草 政やハ伊吹差
藩下總國名所

むめがえ 梅枝 僅馬樂
井源氏物語

たちえ 立枝

ちづえ 沈枝 中津

ほつえ 木末 万葉合
花枝也

ふるえ 古枝

ずはえ 楮

さえた 小枝

木草のえた 枝條 柯支
柔等也

えの木 榎

ひこばえ 藥 撃イ 筈

そえいづる 蓐 ハエテ
草木出也

かえの木 栢木

をえうのまつ 五榎松・五葉

えならぬ 艶

えぞちらぬ 得不知

えたる 得

たえて 絶

ほえ 吠

えにちあれば 縁

えふの身

ちたがえて へ 隨

なえたる 弱

くんえかう 薰衣香

たかさこのをのえ 高砂小江江

またがえて一本また
がへむニツケル

さかりの枝也ノ字一
本ニナシ

茶一本茶ニツクル

そびえ 聳

えんてむ 炎天

かくろえ

花のゆふばえ

花の夕榮也
ゆふはへきも

花のえん 花宴

源氏物
語卷名

えやみぐさ

龍膽

えびかづら

蒲萄

えのあぶら

荏油 脂

ひえ 蕪

えづさい

雀鵝

小鷹也

ふえ 脬

魚也

えび 海老

えい 纓

冠具也

えのは井 榎葉井

うつたえ

茶のなえ葉

くさのもえて

草蒨

でえん 後宴

えんどう

園豆

古藪車也

えびね 苳

のらえ 蘇

ひえどり 鶉

ふえ 吭

鳥也

える 鱈鱧

魚

さたえ 『さいえん』

榮螺子

えほし

さほし

烏帽子

●十四丁

莢一本莢ニツクル

豌豆也 一本ニナシ
莢一本莢ニツクル

ふえ 笛

忘やうのふえ 笙

つえ つゝゑ 杖

かせづえ 横首杖

あをのゝえ 柯柄・鉞柄斧

え 柄 器也

えぶり 杓

えびかう 菑衣被香

えんじ 燕脂 緑色具也

すくえうじ 宿曜師

えびす 伴四句奴蝦夷夷狄南蠻・北狄・西戎・蠻夷東夷

えんのうばそく 役優婆塞

えな 胞・胞衣

こまぶえ 高麗笛

ふみづくえ ふみつゝく書案文机

うづえ 卯杖

さいづえ 罇田 器也

ひさこのえ 杓柄 瓢

ながえ 轆轤 車也

もえぐる 燼

かえう 荷葉 夏ノ蕭物也

もえぎ 萌黃

えぞ 夷・隗

えやみ 瘡病

のどぶえ 吭結・喉吭

のどぶえ 吭結・喉吭

肢四支也 一本ニナシ
●十五丁

灯ノ字一本燈トス

えだ 敵人體也
中肢四支也

あいなえ 蹇

こえたる こゑた
りとも 肥滿

こえて 越・超・踰

見えて 見・覽・歴・看・觀・視・閱・披

きこえて 聞・聽

こゝろえて 心得意獲

風さえて 凍・冱・寒

ひえそて 冷終

思にもえぬべし 思ニ燃ヌベシ

えさらぬ 敢不去・敢 日本紀

えいきよ給ふや 源氏物
語ニ在

こるてのつえのうつたへに 杖打度
万葉ニ在

つらづえつきて 支願 文集

なえぐ 蹇・跛

きえて 消 霜・雪・灯等
也消也

おほえて 覺省

あまえて あまへ
てとも 甘苦

えもの 獲

むどそて 寒・凍 あえこ

ひえもの 冷物

ええなと 無見 日本紀
絶無榮光

こゞめえず 不止得

えふ あふとも
あひてとも 醉酒

あえなきに 無益・天情 本

えんなる心ちして

艶

源氏物語ニ在

ここのえん

『緯縁』

さかえゆく

行共ハ

榮行

あえかなり

なえむめるひわつにほけなる體也源氏ニ在

あえかりもの

ついえ 費弊

こえをく 糞

こえたり 渡

土也

えらぶ 選 撰 勅 擇

える ふり共ニ象也 彫鑿

ざえ 伎才儒

きんえうちう 金葉集

ぎよくえうちう 玉葉集

九ようのほし 九曜星

七ようのほし 七曜星

すいえき 水驛

えいがい 嬰孩

えいよう 英耀

せうよう 逍遙

えうてう 窈窕

ミヤビヤカナリ

えうす 要須

えんそく 偃息

えんきやく 厭却

えもむ 衣文

けちえん 掲焉 イナツルシ

えんせつ 演説

●十六丁
ふうへえうノ誤カ

ひえん 飛檐

軒也

えんりやくじ

延曆寺

さえのかみ

さいの神共

道祖神

ひのえひのご

丙丁

えぞのちしま

夷千嶋

えんぶたい

閻浮提

たちはなのもろえ

左大臣橘諸兄公

四 五 惠

五・濟・生・會・警 此五也

こずゑ 梢

すゑ

標木末也末 杪木末也

ゆくすゑ 行末・向後

ゆくゑ

同上

もごすゑ 本末・季

ゑむ

緋・發

栗也

ゑむ 笑・咲

ゑふ

ふひて えふこも

醉・沈・淵

こゑ 聲・音

ゑくは

曆

こゑたり 肥

ゑふ『くわん』

衛府官

ゑじのたく火 衛士焼火

このゑもる人

近衛々門 兵衛府等也

身一本ニヨル板本タ
イ身トス

餌袋本定 一本ニヨル

●十七丁

こゑのたかゝひ

源氏物語ニアリ
近衛府被官

ゑぶくろ

餌袋 本定「餌袋」鷹也

にゑ にへこも

贅

ゑのこ えぬこ
こも

狗狽

あ拔馬のせちゑ

白馬節會
正月七日也

たうかのせちゑ

踏歌節會
正月十六日也

大志やうゑ

大嘗會

ゑんぢやうゑ

新嘗會

ゑんがのぞ

垣下座

位にすゑたてまつる

奉坐位居

いとすゑ

『へい』 柱礎

すゑ物

陶・陶器

すゑて

『へい』 馬ヲスエ留也

ゑぐ

醜・醜

ゑぐ

中夏本草器具方
女萎顯昭一説

ゑんず

槐

つゑ

杖

もくゑんじ

木櫛子

ゑる

えるこも

彫 木也 雉

ゑ

繪・畫 ヒガク

たみるゑ

丹青繪

文集

ゑがく

畫

さむじゑ

寒

万葉

日にゑいじて

映日

ものゑんじ

怨

すゑのまつ山

末松山

さむじゑ一本さふ
しゑニツケル

定家卿云々 一本ニヨ

ゑじま 江嶋・繪嶋

らうゑい

和漢朗詠集
四條大納言公任卿作

ふづくゑ

ふみつく
えさも

書案

まいゑ 玫瑰

七寶之
中也

ちゑ 智恵

ゑぼし

えぼし
こも

鳥帽子

こもゑ 鞆繪

ゑじやく 會尺

くゑんぞく 眷屬

ゑうち 幼稚

ゑいず 詠歌

ゑちゑ 越後

ゑちせん 越前

ゑいぐ「そ」「わ」の物語榮花物語
赤染衛門十帖

すゑつむ花

末摘花源氏物
語ニ此名アリ

はなつくゑ 花机

ゑおく 衣服

ゑ 穢ケガレ産觸

こしらゑて『へい』誘

ゑはい 壊敗

ゑじよ 會所

ゑかう 廻向

ゑいよう 榮耀

さゑのかみさいごも
さい共 道祖神

ゑちう 越中

ゑぎやうほうじ 惠慶法師

●十八丁

志ゆんゑほうじ 俊惠法師

五 へ 人 ヘツナリ 邊 返 遍 經 部

志りへの山 後山

かへ 栢棗

やへざくら 八重櫻

やへむぐら 八重葎

ちいろにぞへる玉かづら 千尋萱玉葛

さなへ 早苗

いへのいも 芋 又イモトモ
躑躅イヘノイモ

そへ 鮪 魚也

うへをく 栽植 木草ヲ一置也

そへのこ 胆

そへ 蠅 虫也

そへはらひ 蠅拂・白拂

そへごり 蠅虎

せみのおりはへ 蟬織延

うりそへ 守瓜

はへるこ 蛸蚪

かへる 蛙・蟾・蝦蟆・囊 ヒキガヘト

かへる 鵲 鷹ノ二年也

かへる 殍 化也卵

諸本人ニツクルハハ
チ傳寫ノ際誤リシナ
ルニシ

一本・せみのをばへニ
作ル

はへるこ・かへる
ツクルベシ諸本ミナ
はトス

●十九丁

かへるかり 歸雁

いへばこ 鵠

たまへる 給

袖のへ 袖上

かへ 博・改易・更・換・替代

いそべ 礮邊

かまへて 構

さへづる 罇

すへて 居・扣

のほへ 延

ちがへて 違

そなへて 備

あちさへ

衣かりがね鳴なべに 衣鴈金鳴度

いへ 家

たぐへ 比

かんがへ 勘

ながらへ 長久

うつろへ おころへとも 衰

かへぞ 鷄冠木

かたへ 片邊

いにしへ 古

ひかへ 引

さゝのへ 調

なぞらへて 准擬

をさへて 押・抑

さふらへ 候

いくへ 幾重

このへもの 物この 宿直物

いへごうじ 主人女 毛註云

いへぐすり りこも 一愈薬

ひごへぎぬ 單衣

うへのきぬ 袍・衫・表衣

うべ 筥 捕魚也

まきたへの枕 敷妙枕

かなへ 鼎

「スハフキ病也」一本ニヨル

あへぎ 喘息・咳嗽「スハフキ病也」

あへぐ 喘

あへもの 壺

なますをあへて 壺

あへて 敢

ごりあへず 不取敢

かへる 反・歸

かへと 返

かへりごこ 返事

かへりみる 顧・顧「

くつがへる 覆・倒

よみがへる 蘇・活

かへり申す 賽

かへす 耕 田也

けふこよのへに 九重

ひごへに 偏

●二十丁

すべなく 無詮方

うるへり 濕・霑・濡・潤・澤

うれへ 愁・憂・患・悶

いひうへ 饑

ゑへり 醉

たへず 不堪

いへり ばとも 云言

まへうしろ 前後

ちりへ 後

あまさへ 剩賸

かけさへみゆる 影副見

このゆへ 所以・由來

そなへ 饗

てへり 者

をこへ 教訓

うへたり 飢

かつへこうじたり 飢極

たへたり 堪・任忍イ耐

いへども 雖

まへたり 韎・鞅

ちりへせにちほる 面縛

ちへたぐ 冤・戾

けふさへあすさへ 今日副 明日副

このゆへ 事故・辞故

そこしなへ 鎖

にへ にふとも 贄

●二十一丁

まゐるたへ
明月記正治三、九、廿
七、百首ノ歌海書ノ條
ニ「まゐるたへ」アル
ヲまゐるたへ「可候之
由申華」トイフ「ミ
ユ
光見ノ二字一本ニナ
シ

いけにへ 牲

あらにをはらへ 荒和稜

あねうへあまうへ 姉上尼上

うけへば 詛 ノロウ伊勢
物語ニアリ

みごのまぐりへ 夫婦 日本紀

にはへる 匂

まろたへ 白妙

はへ 榮・繩「光見」

たごへ 譬・喩・興・縦

ごへ ごふ共 問・訊

いらへ いらふ共 唯

うらたへて 打堪

身のかくてさすらへぬごも 俗傳、源氏
物語歌也

みを月はらへ 六月稜
荒和稜

よ枝りはらへ 六月十二月晦日
在之稜禊

はたへ 膚

おもへば 思念・懐・惟
以想

かたへすゞしき 傍冷側

さかへ さかえ 榮富

ゆふはへ はえ 夕榮・夕光

心はへ 心緒・意見 日本紀

わきまへ 辨

こたへて 答・對・應

ごるてのつゑのうつたへに 取手杖打
度、方薬

たきゞをおへる 薪負山人

袖うちをはへて 打緒・振間

うたへて一本くはへて
ノ次ニアリ

ふりはへて 振延・延同

みやづかへ 宮仕・宦

うたへて 訴

くはへて くはふ 嚙

いろへて 色交綵

あたへて 與天・工ヲ也

そへて そひて 添副・備進

あつらへて 詔

たよへて 漑 水也

たぐへて ひたく 類彙・屬比

わらはべ 俵子・童部

むまをすへて 馬居

ぬのひきはへてさらす布引延曝

つかへて 仕

さけなどたうべて 酒給

こなへて 唱

あまへて てあまえ 甘辛・甘苦

よそへて 准

つたへて 傳施

なすらへて なからへ 准擬

たくはへて 貯資・蓄

このかうべ 兄部

かすへのかみ 主計頭

かなへのおん 鼎臣

●三十二丁

六 ひ・飛ひ・日・火・悲・非・鄙

よほひほと 流星・奔星

いざよひの月 不知夜月。不知歴!

まつよひすぎて 待宵過

いりあひ 晚鐘・黄昏

やよひ 彌生三月。姑洗

山のかひ 山峽 兩山之間也

みづあひ 溲 〔溲〕

あふひ 葵『薬佐・藿』

はすのはひ はる 密

すひかづら 忍冬草

はびかる 葦・葛・蓐・草

にをひむま 駄

こごひ 特牛

うぐひす 鶯 春鳥子

はづくろひ 擊蕩

ふるまひ 翔 鳥也

こひ こゝる共 鯉・鮎

あはび 鮑・鮫・石決明

やくがひ 貝錦

かひ 貝

かひがら 貝柄

かひおほひ 貝覆

かひこ 璽・蠶

よろひ 鎧・鎧・鎧。甲冑

和名鈔ニハ取又ハ取
蕩トアリ

やなぐひ やなぐひ 簾・筥・簾・胡録

人たがひ 人達〔死〕

ふなよそひ 熨

御よそひ よそほ 粧 裝束名也

ひなあそび 雛遊

おびら 褶 延喜式見女房之上着也

もごゆひ 香

はひずみ 掃墨

はひ 灰

たらひ 澀水海鹽・手洗俗用之

●二十三丁
嗽一本ニアリ

うがひする 『嗽』 漱

たなをひ 手巾

かひけ 搔笥

そこなひて 損

おごゝひ 兄弟

ふるひ 篩

食也一本ニアリ

もてあそびもの 翫物

くひ物 てくひ 食 〔食也〕

くひらばる 剋

こがらひひ 焔飯

こはいひ 強飯

むらひひ 蒸飯

餐ノ字一本餐ニツク
ル和名抄ニハ餐トアリ

かたかしぎいひ 餐饌

そくいひ そくいひ 續飯

あたひ 價直

あきなひ 商・商賣

よはひ 齡

よはひ 娉・嬪・娶・夜這

みこのまぐはひ 合交・夫婦

たまらひ 魂・魄・神

めらひ めしる 盲

みよらひ 瞽

ひたひ ひた 額

かひな 肘 此字ヒゲトモ

ねび人 年預人日本組
調人本云老人

おひうと おいう 老人

わび人 侘人

まひ人 伶人・舞人

人のけはひ 氣 日本組

うひご うぬ 初言

ものぐるひ 癡狂

さぶらひ 侍候

つかひ 使

むまかひ 典馬 安驥云

めひ 姪

あひよめ 姉・姪・姪

むかひばら 當腹

やになひご 養子・猶子

やになひて 養育・頤

つくろひて 療治

ならひて 習・效

なすらひて 准・擬

安驥ハ安驥集ノナ

●二十四丁

肩ハ廻ノ誤宛

もちひて 用・庸

ねがひて 願・希・樂・冀・慕

まじなひて 禁・兇

くひて 悔

うつろひて 移・住・衰

あひて 逢・會・過・合・井・併・遭・值・相・適

おたがひて 隨・肩從・順事・遵行

ごぶらひて 訪・吊

ゑひて 互ふ 共 醉 酒也

くらひて 喰・食・餽

ちかひて ちか 共 誓・盟・矢

たがひて 同上

まどひて 迷・惑

うやまひて 敬

すくひて 濟・救

ひろひて ひろふ とも 拾

あらがひて 爭

うつろひて 本定 徙・月一也、色一也

そひて そへて とも 添備副

ごひて 解説・脱釋

ごひて 問・訊

あぢはひて 味

ちがひて 遠・違

まごひて 蜿轉

まごひて 紆・絡・纏

舊本ノマ、

たゞよひて 漂・澹

たゝかひて 戰・鬪・諍合也

ふる「ま」ひて 震・奮・揮・劔

うたがひて 疑・嫌

うしなひて 失・喪

にぎはひて 賑

あらひて 洗濯・浣・滌

かたらひて 語・談・話・謂

たぐひて 類・比・彙

になひて 荷・擔

●二十五丁

すまひて 角・觥

すまひ すまふ 共 相・撲

やまひ やまふ 共 病・痾・疫・疾

いはひ いはふ 共 祝・榮・榮・神

つがひ 番・手・結・番

きをひて 競 ケイ

さかひ 境・界

たごひ 假・令・縱・假・使

いきほひ 勢・威

にほひ 匂

わたらひ 活

まつらひ 料・理・補

うるほひ 霑・潤

もこひ 基

たがひ 遞・造・互

わざはひ 災・禍・殃

本云一本ニヨル
おさゝひころほひ一
本ニハまかなひまじ
らひノ次ニアリ
板本タゞあひをひニ
ツクル

ぬい一本「ぬい」ニツ
クル

●廿六丁

わづらひ 煩・累

心まらひ 心知

あはひ 交

をひかせ 追風・逐風

まかなひ 肺・賂

をほひ 盖

たまひて 給

かなひ 叶

忘たひて 慕

すまひ ぬい 栖居

あひとて 「ぬい」 愛

むかひ 向

いさぎよひ 潔

なまじひ なましい共 愁

ながらひ 中活・長活

かよひち 通路

をひて 於

まじらひ 参 日本紀
交「本云」

あひれひ なイ 相生

「を」「お」こなひ 行

さがなひ 無悪

こよひ 今宵

いごひ 駄

あぢさひ 紫陽草

おひて 生テ

くなひ 宮内」

うたひて 歌テ

つたひ 傳

なひて 泣

まがひて 續紛

おこよひ 一昨日

ころほひ 比黎

うなひこ 垂髮

こひ 戀

こひねがふ 庶幾希戀
慕・冀

はひわたる 這渡

おひぬれば おい
ぬ共 老

おもひ 思・念・憶・想

いひ 謂

あるひに 或

あひた 間・際・頃・「ケ固」

たひらかに 平夷坦・途

ここならひに 無爲 日本紀アザキ
ナシトモヨム

かひなと 無甲斐

ちひさし 小・少

そひふと 副臥

そのむくひをよふる程 終其報ヲ程酬詡嗜儂

さくら花ちりかひくもれ 櫻花散違陰 古今集ニアリ

おかしうすすさびかひたり 可咲荒淫全經云風吹荒
毛詩云源氏物語ニアリ

頃一本願ニツケル
ケ固ノ二字一本ニナ
シ
別本以外、坦ヲ恒ニツ
ケル

「大鏡ニハ」別本ニハ
額栗ノ下ニアリ

くりのいが 栗判

様大鏡ニハ

ひらいぐり 平栗

ひたいぐり 額栗

ヒタイグ
リトアリ

ちかいさう 稚海藻

海藻也

いぎす 菱

海藻也

いも 芋罍

いへのいも 同上

いものこ 芋子

いもがら 鼓

いもじ 同上

やまのいも 薯蕷

いはつとじ 羊躑躅

いちひ 蘭泉

いちで 覆盆子

いぬたで

遊龍草
犬蓼

いたどり

虎杖
武杖

きい 知母

けいかい 荆芥

いはじり 蟪娘

いろくづ 鱗

いるか

江豚
鮪

こい

「こひさも」
鯉鮪

いそのほね 魚丁

いそのふえ 魚吭

いまつぐ 唼

魚也

いけす 蘘

こゝろもこひさも一
本ニヨリヲオギナフ

薯本ノマ、
一本いちひいちこの
いぬたでいたざりノ
次ニアリ

てずさひ 手談

みやび 媚風姿

ねたひかな 嫉妬

かへさひ申す 復申

うかゞひ申す 窺申・伺候

ひまくひ 馬食 甲斐國ニ在
万葉

七 い・伊・い・已・夢・意・異・溪

いかづち 雷

らい 同上

いなびかり 電

いぬかひほこ 牽牛

いざよひの月 不知夜月
不知[歴]月

いざよふなみ 併徊浪

いはや 窟

いはほ 巖

いは 磐

いし 石

さゞれいと 細鱗石

いさご 沙・砂

いそ 磯

でい 泥・渥

こうはい 紅梅

いちるの木 樺木
ぬちぬ共

●廿七丁
俳個本ノマ、

假名文字遣

四十三

いりこ 煎海鼠

いたやがひ 文蛤

いかるが 鶺鴒斑鳩

せきれい 鶺鴒

はいたか 鶺鴒

かいて 卵

こさい 特牛

さいのつ の 齧

こまいぬ 兎狛犬 師子也

いなよく 鳴嘶 イバウ 馬也

いぬのはう 戌方

いたゞき 頂 人也

ひたい さひたい 額

いがひ 貽貝

いへぼこ 鴿鳩

いなおほせどり 稻負鳥

あいさ 水鳥也 正字可 勘之

えづさい 雀賊

いたち 鼠狼・狢

さい 犀

いぬ 犬・兎・狗・戌

いぬる 乾

いばゆ 嘶 馬也

いがむ 嗥 犬也

いたゞき 巔 山也

いろこ 雲胎

數寄一本數奇ニツク

いほ 譬

ちいさで 小子

人について

いきすたま 窮鬼

いひかしく 饜飯炊

すのいり 條楚刻

れいとゆ 醴酒

にこのたい 西對

いらか 蔓

いとずる 柱礎

こまい 梔

ついがき 築塙

へい 屏

屏風
史記

ごりかい 鳥養

すいたる人 逸人・數寄

文集

若はふるい人 皺古人

いけにへ 犠牲

いりもの 煎物

さくへい 索餅

いへ 家・宅・舍・齋

たいのや 對屋

をとひらいて 排

いとはじき 檜 本定

いがき 瑞籬 神也

ついち 築地

すいがき 透垣

和名鈔、唐ニツクル

●廿九丁

纒ノカナ板本^{スル}ハイカ^ニえノ條
ニモ^トえ^トア^リ

ヨセカクルノ字一本
ニナシ

かいまみ 罽毘^見垣^見史^記 罽其和屏

いごふさ 絲

えい 冠具也

てんがい 天盖

たい 題 詩詞等也

いと いす共 倚子

いるり 圍爐裏

たいこ 大鼓

かい 棹 舟也

いかた 筏・桴

もたい 甕・罇

によいとゆ 如意珠

すいかん 水干

いごふと 類 本定

かいねり 搔練 緋色也

ゑい 影 影像也

けいたい 馨臺 鏡^一等也

ちかい 絲鞋

かうい 靠倚

ほいろ 焙爐

いくさぶね 幢檣 史記

ふねのいかり 碇

いがた 鎔鑄 鐵形也

ちゆかい 酒海

すいちやう 水精・水晶

らくたい 落帶 瑤臺也

ほたくい 板本ほいく
いニ誤ル
●三十丁
楯 板本偏トス

終 板本種トス

たいまつ 續松・松明

ほたくい ほたくい 煨

くい さくぬ 杭

らいと 禮紙 状也

らいばん 禮盤・禮飯座

まきいた 櫪 馬也

まないた 切板 俎

かいけ 搔筭

いひがい 飯 くりてけこのうつはものにもる

身にいたづき 勢煩惱 論語文集
無常損 太子傳典

さい 簋・饗 双六也

しろい物 粉 糕一也
ヘニシロイ也物

さいづえ 罇 甲器也

ついまつのすみして 同上 伊勢物語ニ有

くいせ さくぬせ 株

らいと 櫛子

らいたう 禮堂 金堂前
堂名也

まきいた 敷板

ついがさね 衝重 築重

まいと 簇

いたづき 平題 矢

さい 家子器 菜 伊勢物語ニ有
摩羅生豎等也

さい 柎

さいづち 柎

いさぎよし 潔淨

いろ 色彩綵 いろはにロキ

ものいみす 齋 經須彌嶺 桃李鬼王名也

たちをはいて 帶劔 帶刀

くつをはいて 着沓

いつき 齋 一宮院等也

いもる 同上佛在所 齋場事也

さいはい 幸福・祐

いましむ 警 禁誡人

いとむ 挑

いなむ 固辞

いごなむ 營經・狗

いぶかる 訝

いかる 瞋・怒・忿

まいる 參

いる 射 一弓也

導ノ字二所トモ一本 碧トス

いる 煎物也 炒熬 一豆也

いふならく 聞導・言説

●三十一丁

ものいふ 言

いふ 言・云・曰・導・候・謂

さいなむ 罪

あいさき 央

悪 板本亞ニツケル

いはけなし 稚

にくいけなたる 憎惡疾 源氏ニアリ

いごけなし 稚

ちいさと 小・少

いちあると 掲焉

いざる さねさる 膝行

なまじい なまじ 愆

ついに ついに 終・遂・竟

けいて 稽古

おい老

もちい 餅糎

まい枚

けいちやう 珪瓊

おいて 負

いよく 彌・愈

ひいさ 鼻[貢]

ゆゝとい 目出世にすぐれたる心也、あまりにいまくしき心也、あまりに物にすぐれたるあやうき事也、然間いまくしき也云々

まじない給ふ 猶・壽 遊仙窟 源氏物語ニアリ

はい 頓

おほいまうちぎみ 大臣

ないじ 乃至

いんぐはい 員外

志のいで 凌

さいはい 再拜

いやじ 鄙陋・賤 野入也

いやじくも 苟

いな いなやさも 否・不

いさ いな 不知 誘引言問

いざなふ てこもない 引唱・誘引 不審 文集云 未審

いんくはい く一本 けニツクル

一本桂葉ニツクル

ないがしろ 蔑「如」「一」如也

いさり火 求食火、万葉
漁火也、廻島火、日本紀

いるかせに 忽緒

いかゞせん 何爲

いつか 早晚

いきざと 氣調「

いかきこころ 辛心

いかと 「からし 辛

いかめと 可畏懣

あいなと 無愛

ほいなと 無本意

いごすくくく 寂健々 源氏物語
ニアリ

ねたいかな れたひ
かな共 不分・妬嫉

いたる 至

いたす 致

ついたち 朔「日」「一日」

いねがて 難寢

いさゝめに 只暫 古今井六帖
歌等ニ在之

いなめの明ゆく空 篠目明行空
万葉云空百空也

みたれかい給へる 彈琴也引トモ振トモ
云源氏物語ニアリ

いにけり 行 伊勢物語
ニアリ

はいすへのうへつれなき 強顔
強面

なまめいたる 媚・窈窕・婀娜

もちいらるゝ 被用

ついて 就・付

ついで ついで 次

筆、板本以外多クハ
粘牛ニツケル

すいて 透 簾也

すいて 漉 紙也

さいつころ 近曾

なたいめん 殿上侍臣
名對面

れいぞん 伶人 樂人也

いと くすし
こも 醫師

ゆけいまち 中御門 猪熊在之

かいかのくぎやう 階下公卿

かゝい 加階

こくすい「の」えん 曲水宴三月三日在之
鸚鵡盃

御けいのぎやうかう 御禊行幸

御せい 御製

く「は」んたい 緩怠

すいて 吸・曉 口也

すいて 犁 田也

ういかぶり 初冠 叙爵也

御すいぞん 御隨身 兵杖也

おもけい 下家司
院司之其一也

ゆけい 輓負

やうめいのすけ 揚名介

ないけうぼう 内教坊

ささいのみや 后宮

ついなのおちゆく 追難除目
縣召是也

ていわう 帝王

いみな 諱・諡

たいてん 怠轉

●三十三丁

代官ヨリ詠マデコノ
一本ノ上段ニアルモノ
一本下段ニアルモノ
一本上段下段
ニアルモノ
ニアリ尙以下順序顛

ズ異同アリ一々記セ

いうぞく板本いうま
よくニツクル
鎮西之是也ノ字一本
ニヨル

榮一本榮ニツクル

さいもん板本さいト
シオ文ヲオ文字也ト
ス

體ノ字一本ニナシ

いうす一本ニヨリテ
オギナフ

守宅神ノ字一本ナシ
魅ノ字并ニヤマノカ
ミイヘンカミノ字一
本ニヨリテオギナフ

たいく「は」「わ」ん 代官

いうそく 右族・有職

さいなん 災難

すいおやく 垂迹

ゑいがい 嬰孩

てうてい 朝廷

せい 性

きやうかい 境界

てい 躰「體」

「いうす 捐」

いうな「る」「り」 優「也」

いなり 稻荷

いへのかみ 「魅」體 「守宅神」

たいかん 對捍

たむたい 探題 「鎮西之是也」

く「は」「わ」さい 火災

すいさう 瑞相

ゑいよう 榮耀

けいめい 榮顯 遊仙窟「在之」

さい「もん」 才「文」 「文字也」

えいてつ 映徹

ゑいす 詠 「ワタリ」

いはとみづ 「石」「岩」清水

さいのかみ 「さみとも」 道祖神

いはふ 崇 神ないばふ也

岩瀬森 一本石瀬社ニツクル

ふけぬこも 一本ニヨ

●三十四丁
漆板本漬ニツクル
雨降也以下云々一本ニヨ
生駒 一本伊駒ニツクル

ル
こおほきか 一本ニヨ
典侍ノ二字 一本ナキ
ナ可トス
かういの下 一本云
「別殿則更衣也漢書
孝章云爲武帝更衣云
々史記外數世家云從
四位下乙魚柏原天皇
更衣也」
さいばら云々 一本ニ
「僮馬樂其名也さい
ばらのさきかこも
かへこも云也」

いはふ さいはひ 祝

いきの松ばら 生松原

ふけいのうら さいはひ 吹飯浦

いすゝがは 五十鈴川

いさ「く」らを川 潦小川

いぶき「やま」 伊吹山

おほいもうちぎみ 大臣

おほいどの 大臣「殿」

『こおほぎみ 小大君 後拾遺巻 願作者也』

うばい 優婆夷 「女名也」

たうめいほうと 道命法師

かうい 更衣 さいばらにある也
それハ衣かへさうたふ也

そせいほうと 素性法師

いはせのもり 岩瀬森

いくたの浦 生田浦

いかほのぬま 伊香保沼

いさや川 不知「哉」「小」川

いさらちみづ 潦水 「雨降也三時庭ニアル所也」

いこまやま 生駒山

おほきおほいま「う」ち君 大政大臣

ないこのかみ 尙侍「典侍」

「いつき 齋院」

かうい 更衣 後の准也別殿に居する也
漢の武帝の時より始也

いもうと 妹

再従父兄弟一本再従
兄弟ニツクル
「由殿従父」ノ字アリ
るいくは一本るいく
わのトアリ
榮花物語ノ下一本「四
十帖赤築衛門作」ト
アリ
帝範ノ下一本「太宗
製作」トアリ
待賢門ノ下一本「陣
外十二門之一也」ト
アリ
いづきこちやうけん
すいいなひかり一本
ニナシ

おノ下一本ニヨル
くものノ條一本「井
雲井蘭雲の傳習書本
定」ニツクル
わくさ一本ニナシ

●三十五丁

いも 妹

いろ 母

いここ 従父兄弟

あいむこ 姪

さいと 妻子

たいけんもん 待賢門

「いなびかり 電」

八 お・井・「居」・遠・爲「此の也」委

くも井 雲居

「るぐさ 蘭」

ある 藍

くれな井 紅

かぞいろ 父母

いやいここ 再従「父」兄弟

あいよめ 妯娌

るいぐは物がたり 榮花物語

ていはん 帝範

「とちやうけんすい 五丁硯水」

くはる 「田鳥子」「鳥芋」

あるとる 澱

るのこづち 牛膝

とるとは 椎柴」

いらぬの木一本「ぬちいの木いちぬさも」ニツクル

「こいとも」一本ニヨ

水鶏ノ下板本鶴鳥ニツクル皆蓮鳥ヲ誤リシナルベシ

鷹の云々一本鷹也ニツクル

來板本木ニツクル

春鳥子黃鸝一本ニヨ

わづ條一本「お井のまゝも猪玉玩」ニツクル

亥兒一本亥子ニツクル十月云々一本ニナシ

餉の下一本「餉」旅人食事也ニツクル

やなくおノ下一本「籬」ニツクル

このぬものノ下一本「このへ物とも宿衣」

まぬてなる一本「まぬて強」トス

さむたつま 若草【也】

万葉在之

こる 「こいとも」 鯉【鮒】

える 鱧・鱧

るもり 守宮

法花「經」在之

さるるうぐひす

來居鶯

「春鳥子黃鸝」

る 猪猪王知

ぬのまゝ也

くまのる 熊胃

【もちる 餅】

かれるひ 餉

飯の事也又旅食飯也

このる 宿直【殿居】

二あるのこうちぎ 一藍小掛

「衣裳之類」

にるまくら 新枕

もちるる 用庸【尋】

いちぬの木 櫟

うなるまつ 馬鬣松

童子松「イ」

くるな 水鶏

【鶯】

こみ 木居

鷹の木に居也

ゐのこ 豕豚

一本ぬ

ゐのこ「の」もちい 亥兒餅

「十月亥日在之」

あさかれる「朝」餉

清涼殿「にて」朝の供御也

やなぐる 箱籠

胡籬籠

このるもの 宿直衣

山あるにすれる衣 山藍摺衣

「衣の色也」

つるに ついにさも 遂終竟

ゑるて「おる」 強【折】

なまじる「に」 愁

「なましひ共」

なきまゐる一本ニナ
ク「あきし井なまし
ひさし一本ニナシ
盲」トアリ

うのくしの眞字一
本鶴トス

笑一本「疾戯居源氏
物語ニ在」トス

居ノ下一本「立居タ
チ井」トアリ

●三十六丁

いもの井たけ一本ニ
ヨル

和名紗にハ断ハ井ル
断ハジミあり

胃腑一本「臈府井ノ
字キモトモヨム」ニ
ツクル

さけを忘る「て」酒強「勸酒」

「るなか 田舎 鄙活」

「まご井 述」

「はたく井」

めぐる 「めしひこも」 盲

わらひを「ほ」「ひ」れるたり 笑

るる 居

いへる 家居

忘ながごりる 尻長取居

ゐてたてまつる 奉將 源氏物語ニ在之

「いもる 齋 潔齋也」

はるる 断 「虫なまの穴に
はゐる事也」

るのふ 胃腑

「なきまゐる 晴盲」

「すまる 栖」

「えのえ井」

「そすのえ井 密」

うるくし 黻「初敷」

ゐどころ 居所

でるさぶらひ 出居侍「亭侍」

まごる 圓居・的居

ゐざる 膝行「居去」 いさる
さも

ゐる 鰯 「舟のゐる」也

「井たけ 居長」

忘るね 瘤 「病也かさ
の類也」

よるあかつき 宵曉 よひ共

勅別當ノ下、上北面ノ上、一本更ニ「ぬんし」トアリ
武者所以下十字一本ニ判官代主典代ト

板本「正從一位以下位階等也」マデノ字ナクシテ只「一位至八位」ヲ五字トス

るようさう 癰瘡 「うき」の類也 ろかひ 猪耳 「おのま」を飼者也

よるのそう 夜居僧 によろん 女院

るんじ 院司・執權・勅別當・上北面・下北面 武者所兵杖主典代等也

うなるこ 童子 万葉ニ在之又童女うなるをこめ云也

一るより八るにいたる **「一位至八位」**

『正從一位 正從二位 正從三位 正四位上

正四位下 從四位上 從四位下 正五位上

正五位下 從五位上 從五位下 正六位上

正六位下 從六位上 從六位下 正七位上

正七位下 從七位上 從七位下 正八位上

正八位下 從八位上 從八位下 大初位上

大初位下 少初位上 少初位下

已上位階等也』

あがたのぬこ一本
【こ】ノ字ナシ、且甲斐國ニアリト注ス

あすかの一本ニハニ
ヶ條トシニハ「洛
中名所其也」トシ
一ニハ「催馬樂名也」
ト注ス

ふけるかは一本「ふ
けるのうらふけいの
うらさも吹飯浦或無
一字」トス

●三十七丁

くらる 位

る 井 『井の水』

る げた 井 桁

山のる 山井

あがたのる「ど」 『縣井戸』

すそ「は」「わ」の田る 縁輪田井

あすかる 飛鳥井 名所也
催馬樂在之

る せき 堰「堀」

「つくばの田る 筑波田井」

る ぞのたまみづ 一本井又川 一本手 一本川 井出玉「水」

る なみの 印南野 『万葉在之』

る ぞのおミヅ 井手大臣

せうまやうのあま 小將井尼 後撰集
作者

くらるやま 位山

る「づ」 韓

そこる 底井 袖中抄在之

さきはる 常盤井

たまのる 玉井 『甲斐國ニアリ』

いけのいる 池槌

たなかのるど 田中井戸

おほるがは 大「井」「堰」川

ふけるかは 吹飯河

る なの 猪名野

さかるの人さね酒井「人真」古今集
作者

ほうるん 法印

るんぐ「はる」「わい」 員外

るしまがさき 猪島崎

おさるのさこ 起居里

るん の詩 四韻詩

るねう 圍遶

べうるん 苗胤

るゆ 委趣「意趣」 「一曲」

るさい 委細

さりる 鷄栖楳鳥居「イ」

一本無爲ノ下ニ此
二字ヲアチキナシト
モヨム「トアリ

ぶる 無爲

みるぞら 三井寺「園城寺也」

からるさき 櫛

いぬる 乾「方角」

さりるちやうじ 通入障子

業宸殿のうしろの七間の中の間の障子の名也又鳥居障子とも書也

いもるのには 齋場「精進也」

かゝるのみや 香椎宮「筑紫」

「又鳥居障子とも書也」
一本ニハ「鳥居さ
りしうやしも」
ニツクル

九 ほ・保・本「不也」 帆・穂「甫」

おほそら 虚空

いはほ 巖「岩」

あさがほ 槿

ゆふがほ 夕顔・瓢

ほうづき 酸漿・菩枕

なほまゝ 直木帝鏡在之

ほうづき一本ほぼつ
きニツクル

すなほ一本下ニアリ
閑一本閉トス

粧、一本小トス

をほひノを板本さニ
ツクル

おほふべき袖ノ下一
本「こそなけれ」ノ五
字アリ

●三十八丁

ころほいノい一本ひ
ニツクル
毎一本「整」トス

みさほにノ下一本
「もてつけて」トアリ

「すなほ 淳直」

かほごり 貞鳥

「なし島の異名
二説維也云々」

おほたか 白鷹

まほにも人に「直帆人」

「うるはし
き心也」

をほひ

肥

「ハチマキトヨム」

まごほの衣

「まごを
こも」 間遠衣

ほのほ

「炎」焔焱

おほふべき袖 可覆袖

かたは 片巻カメクラ頑

ごごこほる

「淳」滯

『たれさなくかゝるおほみにまが』

新嘗會ニ小忌衣
着スルヲ云也

おほけなし 無大氣

ごほる

「ごおり
ごも」

通「達」徹・融

ごゝのほる 調「愁」「整」

にほふ

「にほひ
ごも」

句「苞」

かほる 「香」匂・薫

いきほひ

「勢」威

ころほい 比・旬

「ころほ
ひごも」

うるほひ

潤「濕」霑

よそほひ 粧

みさほに

「心」操

「たへたる心也」

にほごり

鷓鴣・鳩閑水鳥 「伯母集
ニアリ」

さほ

棹「繕」架 「一本篙」一本竿

あけのそほふね 緋粧舟

「ふなをき
たる舟也」

雨細降一本三細雨

雨のそほふる 雨細降

〔そほる袖 凋袖〕

そほちけり一本

そほちけり 滋 ぬる、心也

かほ 顔〔貞〕

かきほ一本

かきほ 垣生 かき也

かほあかむ 忸怩

まさり一本

かほほせ 貞〔容〕

まさりがほ 〔無〕相 りいせ物かた
りに在之

直人一本

なほ人 直人

さほひめ 佐保姫

おほる月夜一本

おほるのおこゞ 融大臣

おほる月夜 朧月夜

おほる月夜一本

おほるのいせんじ 關白宣旨

おほやけ 公

衣通姫

そごほりひめ 衣通姫

おほぢ 祖父

大舍人寮

おほごねりれう 大舍人寮

おほきみつかさ 正親司

大藏省

〔わうかんごほり 王家無等倫
源氏物語ニアリ〕
おほはらのなかのべ大場中邊大内中
邊程名也

大原小壙

おほくらおやう 大藏省
おほはらやをしほ 〔山〕大原小壙 〔山〕

山田

おほこのる 大宿直
山田もるかりほ 山田守假菴

末ハ樂ノ草チアヤマ
レルカ

菴、一本廬トス

二入一本再入ニツク

おほぎまち 正親町 【小路名也】

一志ほ二とほ 一入二入

【おほあらしきのもり 邑樂森】

おほつのうち【い】そのはま 【大津打】

いねのかり志ほ 稻刈入

志ほみちくれは 【盛イ】 塩満來

志ほがまの浦 塩竈浦

かたほなみ 【かたなな】 瀉保波

もとほ 藻塩

にほてる海 湖照海 【光イ】

うとほ 潮

いかほのぬま 伊香保沼

おほうみ 滄溟

おほよどのうら 大淀浦

さほしか 【巳下四語】
本ニヨル

【さほしか 【さなし】 牡蠣】

【志ほで 棘鞆鞆 【鞆也】】

【もよほす 催】

【すなほ 直 【なほすとも】】

おほかはのべ 大河邊

おほる川 大堰川・大井河

さほのかはら 佐保河原

みほさき 【美】 見保崎 【出雲國】

みほの松はら 三保松原

ひえのおほたけ 比叡大嵩

おほち 大路

おほえのあそん 大江朝臣

大路ノ條一本御路日
本紀大路万葉トス

姓一本氏ニツケル

大直比歌ノ下二本ニ
「神樂前也」大嘗會大
歌所也」トス

みしまつしほのみさ
こ一本ナシ

暴板本墓ニツケル

一本白川のみつわく
むまでノ下ニ「老に
けるかな」トアリ、三
輪組ノ下「老人ノ腰
カ、ミテ左、右膝カシ
ラ」ノ頭已上三マロ
キ輪三ツミ合タルカ
如ナルヲ云」トアリ
うらわかみノ下一本
「れなげに」トアリ、抄
若一本「暴若摩吉伊
勢物語詞也」トス

おほ中こみ「の」うち 大中臣姓 おほこものくろぬと 大伴黒主

ふちはらのとなほ 藤原言直古今作者 うつばの物がたり 宇津保物語「廿

おほかほ「の」くるま 大顔車 おほなほびの歌 大直比歌「廿

いほり 庵「廬」 草のいほ「り」 草菴

くにこほり 國郡 こほり 氷凍

「若ほる 枝折」

「みとほ 御修法禁中の祈禱也 「や若ほのひさこ 椰子杓」

十 わ・輪此物也 倭・和・の至也 棺入・丹入環環也 生關東貫木」

のわき 野分「風」暴風 「のわきのかせ 慕風」

さわらび 早蕨 すまのうらわ 須磨浦輪

志まのくまわ 嶋隈輪 すそわのたる 縁輪田井

白川のみつわくむまで 三輪組 うらわかみ 杪若伊勢物語在之

●四十丁

みわきがたじ 難見分
たわつけて 髪「たわつくる」

かたわもの 片輪者「頑者」
車のかたわ 車片輪

かなわ 鐵輪「罐」
ひわりを 檜破子

まわざ 爲
ここわざ 諺「事」

まわびぬ 仕侘畢
まびわなる 「ほど」 稚「日本紀讀之」

まなわぬ 繩
あわ 泡「水一也」

いわ 岩
あわゆき 淡雪

わくらは 纜「ツツカニ」
わびびこ 侘人

ひわつなる人 「弱」 「正字可勸之」
わひこ 我人「袖中抄」

まんわう 親王
みわのかみ「一本みやうしん」 三輪「明」 神

わたる 巨度
わたす 渡

ごわたるふね、戸巨渡巨
わきまへ 辨弁

わらはべ 童部
わたくし 私

まなわぬ以下六語一本ニヨリテオキナフ

わたる以下十二語本ニナシ

【わらのみね 鷺嶺】

【わかさのくに 若狭國】

【わけはぶく 分省】

【わかつ 分】

【わかれ 別】

【わちがへ 輪違】

一本字半、彙葉トス

十一 ば・波・を【者也】 へ【ハ也】 せ【盤也】 半・端・葉

よは 夜半

いは 【いわ共】 磐岩

いはは 巖【岩】

いはや 【崖】 窟

一本「あはのき者沫雪日本紀沫雪万葉」トアリ

あは雪 沫雪 万葉在之

あは 【あわ共】 沫・泡・漚【淡】

にはたづみ 潦

にはび 燎【庭火】

には 庭・場・塚

さは 澤・阜・隰

●四十二丁

ふじのなるさは 富士鳴澤【不盡】 ひろさはのいけ 廣澤池【

みぎは 汀

なはて 曝・阡・陌

すはま 酢漿洲濱

からは 柏榭

岩一本 藤ニツクル
朴相一本ニ厚朴トス
このてかしは一本ニ
ヨル

枝撓ノ下一本 枝孺娜
トアリ
めはしき云草也一
本著ト云草也ニツ
クル

麵一本「餅」トス

しはふきの下
「咳歎」軟病遊仙
トス

いはごがらは 岩戸柏 「万葉
在之」 ほうがらは 朴柏

「このてがらは 兒手柏 「説冬履盆子
一説白き女郎花又茶」

か「に」はざくら 榿櫻 よかはのすぎ 横川杉

きはた 藥 すはう 蘇枋

枝もたはよに 枝撓 「ぬたのた
はむ也」 たまはよき 玉箒 めはしき
云草也

あは 粟 あはなへ 禾 粟のなへ也

ぬなは 蕁 「うき草也」 かくなは 搔繩

なは 繩・索・「縁」 つるべなは 綆

たはら 俵 くは 鋏「鏢」

かは 皮・革「丘」 びは 琵琶

むぎなは 索麵 かはらけ 土器

うつはもの 器 うはらき 鞍褥 「くらの
しき也」

なはふき 歎嗽 つばき 唾・涎

障碍一本「月水、女人也」トス

さはり 障導礙

はゝ 母孃

わらは 童男童女

わらはへ 娠子童部

わらはやみ 瘡病左傳在之
本草在之

みかはびこ 御河人「うへは物と云」

瘡病一本「キヤヘウ」ト假名ヲツケ又「店ヲコロハラハヤミ」ト書キソヘタリ
女一本妻トス

うはなり 後女

まはゝゆひこ 鹹

のゝあはび 熨斗鮑伸鮑

あはび 鮑腹石决明

●四十二
さいはい一本「さいはい」トス

さいはい 幸福裕

わさはひ 灾禍殃

矜一本「怪」トス

あはれむ 憐愍矜

たはむ 撓嫻娜鼻

阻一本「怛」トス

あはむる 阻日本記在之

あさはる 紀「日本紀在之」

まはるの正字一本「障碍」同トス

たけなはなる 酣

さはる 障阜礙

まじはる 交雜接錯

きはまる 「極」窮鞫究漻「政要」「谷進退」

いはけなと 稚

あはくと 淡々「今敷」

周章ノ下一本「法華經」阿ハルトモ」トアリ

あはたゞと 周章

にぎはと 饡贍

假一本漫ニツクル

板本たいはしチた、らしニアヤマル

改以下五字一本ニヨ

言語詞辭一本「詞辭言」トス

わくらはくればさり一本ニヨル

「あはる 燧」

うるはし 麗・羶・華

みたりがはし 狼籍・謗・妄・猥「濫」

こはし 強剛・健「勁」

たゝはし 嚴重「崇」

「やはらぐ 柔和・軟・奕穩」

くはし「く」 委「曲・委細」

たまきはる 玉冠春 命の終也

さはやかなる

「さほら、なり共」

爽正「又さ、や、也」

かはる 代替「改・易・換・博・更」

「やはらぐ

「柔和・軟・色」

たづさはる 携

あらはなり 祖・外・顯「露」

にはかなり 卒介・頓・俄

まこはす 纏 「運云」

あらはす 彰・表・露・顯・形「旌・現」

こりまはす 取廻

かよはす 通

「かよふ共、かよひ共」

あはす 合併・併・勦

こそば 言「語」・詞・辭

こそはり 理「裁」「是コトモ、ハルトモ」

「わくらは

邂逅

「遊仙窟」

「くれはこり

「吳服綾織名也」

くはたつ

企「跋」

たはふれ

戲「嬉」

「たはふる、こり」

●四十三丁

茅葉屋破神 一本千磐
破神

岩瀬森 一本石瀬杜

一本十二月ノ下ノ臘
月走馳・師馳「ニツク

ひかりのそはぬわが身なりけり
「光」不添「吾身」
「万葉」
在之 「拾遺歌」

ねてのあさけの霜のふりはも
寝朝食霜降場

ふさはしからず 不祥
「日本紀」
在之 なにかのする 耳従

うはがき 表書
「文のう」
は書也 いはふ
「いはひ」
ミヒ 祝「崇」「榮」

ちはやふる神 茅葉屋破神
「よかは 横川」

かはや 厠・園
ひはたふき 檜皮葺

あはたぐち 粟田口
あはづの 粟津野

いはせのもり 岩瀬森
こはたやま 木幡山

「なにはえ 難波江」

こきはる 常盤井
をこはがは 音羽河

「すはのみづうみ 諏方湖」

そはす 十二月・師走
「びはのき 枇杷木」

「かはせうよう 河逍遙」

十二む・武・無・无・人・舞・牟

むべやまかせ 宜山風

むべなるかな 宜哉

〔むち 鞭〕

〔むちうちて 策〕

むべ 宜 古今集 在之 日本紀 在之 諾

むもれみづ 埋水

むもれぎ 埋木

むもれたるり 仕羽

むは玉のよる 烏羽玉夜・烏〔羽〕玉〔墨〕・黒玉・烏珠 うはたまき

まどろむ 〔甞〕寝〔寐〕 〔むはふ 奔〕

さむし 寒・〔冴〕 〔むまる 牛〕産 うま

むつかる 叨 人のな 事也 〔むは 祖母〕 うは共

むまれつき 生得 〔むまじ 美〕旨・甘・熟

むまこ 孫 うまこ 共云

むめほし 烏梅梅干

むまさもの 美物 うまさ 物とも

むばら 荊〔棘〕根・棘・荊〔棘〕

卯一本卯

●四十四丁

都ハ都ノ誤

むべ 『うへこも』 「都子」「郁子」 めむま 牝馬・驛「驪」

むなぎ鱸「鱒・鮒」「魚順和名鯉魚・鮠」 むまぎぬ 「馬衣」馬被「褐」

むま 馬「駒」 むまかひ 鬪人

むまかひの眞字一本
鬪人ニツケル共ニ鬪
ノ字ヲ誤リシモノナ
ランカ

むまくは 馬枕 『本定』 むまやのおさ 驛長 『聖廟御作在之』

むまふね 馬槽「槽」 むまくすし 張里

むまやち 驛路 むまや 厩

做一本刷ニツケル

むまき 『うまきこも』 牧 むまはたくる 馬廠 『誘事也』

むまひる 馬蛭 むまひゆ 馬覓 『草也』

十三 う「宇」卯「有」得 『後也うにかよふ也』 羽・鵜

あをうなばら 滄溟 あらうみ 「溟海」「同上・荒海」

みづろみ 湖「水海」

『よしのがは』瀧のかうち 『吉野川』瀧河内 『吉野在之』

ほうりやう一本「リ
やうほう令法」

こうはい 紅梅

ほうりやう 法令

くはんさう 萱草 『わすれ草也』

ふよう 芙蓉

からうと 苧 『からむしさへ
いはさる也』

ふくろう 梟 『梟ヒヨウ云詞也』

かれうびんが 迦陵頻伽

こう 鵠

かめのこう 龜甲

あめうと 黄牛

めうと 犢

こうと 犢

めうこ 犛牛 『牛也尾ニ
銀在之』

へう 豹

てう 『粘』『帖』『疊』

はたるたかう『こび』あがる『螢』

高飛上 伊勢物語在之

てんちやう 天井

ちやうじ 障子『床子』

びやうぶ 屏風

てうと 銚子 『提也』

『十』ぞう 帖 『双紙のかす也』『疊』

かこう 金具 『かこふ
さも』

さうがう 冬瓜 『かほり也』

らうそく 蠟燭

●四十五丁

めなう 馬腦 【碼腦石也】

ゑわう 雌黃

わらうた 菡 【圓座也】 菡 【圓座也】 伊勢物語

ゑやうこ 【鉦】 【征】 鼓

びはのこう 琵琶槽

かうれうさん 廣陵散 【藥名也】

かうぶり冠 【被】 【幘】 弁 【かぶり共】

たたらがみ 疊紙

ふせんれう 浮線綾 【表の類也】

ころも 【を】 ふるう 振衣

べいゑう 【陪】 【倍】 從

すまうのせち 【悉】 【すまふとも】

れうじ 獵師

ちうぢやく 鎗石

かうそり 剃刀 【かみそり共】

ねうはち 鏝 【鉞】 【鉢】

ほうきやう 方磬

れうわう 陵王 【唐の王の名也】

あなたうこ 【穴貴】 【又催馬樂】 【安名尊、催】 【たふ也】 【馬樂呂歌】

たまのかうぶり 玉冕

けじやうする 假粧 【化装】

ろうさう 緑衫 【緑遣】

く 【は】 【わ】 さう色のはかま 萱草色袴

相撲節 【會】

れうじ 料紙

伊勢物語 本 源氏物語ニアリ

一本 陵ヲ凌ニツクル

浮板本 輝ニツクル

●四十六丁

柿本一本ニナシ

大かくれうの條一本
大かくのまう 大學
察源氏物語ニアリ
ニツク

ちうご 舅阿翁

ちうごめ 姑

いもうご 妹【婦】

をごうご 弟 【なまの時の時はお也
おまの時の時はお也】

ざうり 草履

やうじ 楊枝

たうさき 犢鼻褌

ちたうづ 襪【子】

ふね一そう 舟一艘

まうけのきみ 儲君【春宮】

すはう 蘇枋

【柿本のまうちぎみ 柿本大夫】

御ざうし 御曹司

大かくれう 大學

をうしかうちのみつね 凡河内躬恒

さうにん 相人

もんになぎさう 文人擬生 【源氏
在之】

あなうら 跣【踏・蹠・蹠】

こまうど 高麗人

やいごう 灸【灸】

ようごう 用途

かうふる 蒙【被】

うなづく 【任頼頼】領【狀】

あなうめ 穴倦目 【古今在之】

はうふる 葬

あぢきなう 無爲 【史記
在之】無道 【日本
紀】

むくつくけう 蠢

【け】を ちう 下習

け【よ】ちう 『けいしうい』 賢

いこちう 音信

『いこいたう 寂煩』

『さうどきて 日』

すけなう 無人望

心うつくちう 心嚴

てうづ 手水

まうく 設・儲

めさまちう 『寂煩』『見覺草』

うれはちう 方怒

うれちう 『嬉』怡・歡・喜

このまちう 好

くたくちう 『アタシキ』

『細』碎・石竹『金錢何』

うむじ入給う

『慍』『温入』 老子經在之 源氏在之

まじな【い】たまう

猶壽 遊仙窟【在之】 『源氏にも云也』 『源氏物語ニアリ』

なつかちう【す】 假顔政要之昵・懷

ちうねと 強

かつへちうじたり 飢極

ひあやうと 誰何アレハタソヒアヤウシ火夜行【説云ひや】 『秦始皇本紀也』

あやうと 危

さうくち 寂

別本「寂、寂莫」ニツ
クル

さうさじ 寂「寂」

ものうじ 慵「懶」倦

そうじて 惣「摠」

はそうじて 細織

やうやく 漸

ごう「く」 夔「々」つゝみの聲也

ふたうなり 不當「也」

せうそく 消息 「文集ニアリ」

はうちやう 包丁

なんこう 難「劫」功

せんさう 心操

べうそい 苗英「苗裔」

「くはう 光」

からうじて 辛苦 「日本紀」

ゑかうじて 「而」然

わかうじて 稚幼少若弱

やうく「と」 微

けうなり 希有

けうらなり 「鼻乱」交羅也

けうたう 澆漚 酒「盃」也

れうり 料理

りやうほう 令法

らうろう 牢籠

せいべう 聖廟

「れうせうたをやか也 躑躅」

「こうそゆう 口入」

一本「ほうりやう法
やうトチ一條トス
一本」トス

「がう 郷」

「さやう 卿」

「りうたんの花 龍膽花」

「たうけ 巖剗」

「かうもさみ 髮鉸」

「てぼう 手棒終」

「かれうひん 迦陵頻」

「くそんそんちやう 勸進帳」

「れいそゆう 領袖」

「そゆうそやう 周章」

「うなひこ 垂髮」

「べうゐん 苗胤」

「たうちやう 道場」

「おうご 擁護」

「ほうもん 法文」

「みはかう 御八講」

「みずほう 御修法」

「けうやう 孝養」

「らうもう 老耄」

「そうす 奏」

「まうす 言・申・啓

「ねうす 忍」

「てう 牒・御「牒」

「れう 寮」

「きつかうてん 乞巧奠」

「てうし 調子」

●四十八丁

「是なきりつぼ云」
ナ一本「桐壺也」トス

一本夕チ暮ニ附チ付
ニツクル
板本「いふ」チタトス
一本度チトス
一本園チ酒トス

『てうがく 調樂』

『てうやうのゑん 重陽宴』

きやうくは『わん』の『ぢめく 京官除目』

なやらう 追難

らう『ぐゑ』『け』つ 臘月 ころらうでん 後涼殿 「是なきりつぼ云」

たうのみね 多武峰

十四 ふ「不」「不也」 岑 「布也」 婦 「婦也」 「府」「普」「風」「扶」「符」

ゆふづくよ夕月夜 「萬葉集」 夕附夜 「日本書紀」 いふさり 夕去

ゆふべ 夕「晚」 ゆふづく 長庚・大白星

『月に』うつろふ 移 「月影のう」 うるふ月 閏月

まがふ 續紛 いざよふなみ 徘徊浪 「綱代にや」

『ふふき』 ふうきこも 落草也 『かよふ』 「かよひ共」 通』

みくまのゝ浦のはまゆふ 三熊野『々』浦濱木綿『大臣大饗之時濱』

木綿以熊野々畏金鳥足也

件の名所伊勢國に在之

よもぎふ

蓬生

又源氏物語卷名

芙蓉

あふひ

葵藿

あじのかれふ

葦

枯生

玉かづらはふさ

玉葛藨木玉葛藨

おふるひつち

穉

いれかりたる跡におふる也

あふち

樗

こづたふ

木傳

鳥の水をつたふ也

まのかぶ

株

めかふ

和布声

頭

そのふ

園生

圃生

うふ

うふる

栽

前栽

殖種

植

みそのふ

御園生

れふ

おふる

生

草木

殖

かさにぬふてふ

笠縫

二云

ぬふ

縫

をぎぬふ

補

つきぢらふ

突

人をつく事也

かふ

飼

鳥犬を養也

馬牛牧

ひかふ

扣

馬をひかふるなり

性

はふ

跂行

虫のありくすむた也

遣

虫行也

あふぎ

扇

扇篋

あふり

あおり

泥障

あをり共

こてふ

泥にたけり

胡蝶

てふ

うごも

蝶

●四十九丁

一本、苑ヲ築トス

板本、誼ヲ阻ニツク
ル一本、「類ニツク

〔たくよふ 比類〕

のろふ 咒詛

かけろふ 蜻蛉・虹蛭・胡螯

〔又〕源氏物語在之

きらふ 嫌

きたふ 腊

うらなふ 占卜

ふるふ 〔奮〕振・揮・震

ふるまふ 翔

たよふ 湛 〔水一也〕

たづさふ 携・馴

をしみたばふ 惜持

うちはらふ 斗藪・撥・拂・擺

たゆたふ 猶預寛浮動

〔にはふ にはひとも 匂〕

〔あがふ 贖〕

くはふ〔る〕 〔くほふるとも〕

加 かふ〔る〕 更 〔衣をか 改替・換 ふる也 博易代〕

かふ 買 〔うりかふ也 賣沽類〕

たごふ 喩・譬・興

たぐふ 〔比〕類・屬・彙・杭

てあらふ 盥・澡

あらふ 洗濯・浣・滌

かてふ 〔かこひ 共〕 金具〔也〕

かてふ 〔かこひ 共〕 燃・培・圍 〔かこひ 共〕

にぎはふ 贍

ひろふ 【ひろひ 拾】 撫 【ひろひ 捕】 追囚・擒・收・幽

【むかふ 向・對・嚮・迎・邀】

たくはふ 貯・蓄・資 【そふ 添・副・傍】 『山』

ためらふ 踉蹌 【伴・伺・聞・健・強・健】 知蹶

【こばふ 捍・拒】 【ごりふ 埠】

あかふ 【ちかひこも 誓盟】 【ゆるふ 弛・緩・縱・許・緩・除 免・赦・厚・聽・容】

【つくろふ 洗・菌】 【つくろふ 療】 『治也』

つくのふ 償 【わきまふ 辨】

のこふ 拭・揮・繕 【拭・涙】 【うやまふ 敬・恭】

そこなふ 殘・害・損 【たまふ 給・賜】 『詔』

あたふ 與 【クミストモム】 【のたまふ 命・宣】 『日』

【さよふ 支】

かなふ 叶 【稱・合】 【お】 『を』 『さふ 抑・押』

●五十一

つがふ 番結

つかふ つかふるとも 仕事使

へつらふ 諂諛

かずまふ 數算

さぶらふ 侍候

ひこづらふ 如干

大ゆふ 大輔

少ふ 少甫

こふ 問

いこふ 駄

からすあふぎ 射干

あさぢふ 淺茅生

せうちやふ 少將

あらそふ 争諍

心ちらふ 煖熱

なづそふ 馴狎

いらふ 應諾答聲

さすらふ 伶俜 龍隱

さらほふ 饒 莊子在之
八の名也

やらふ 攢迫

さまよふ 吟迷

やこふ 雇 ● 出也

やすらふ 徘徊

よばふ 呼喚叫

かどふ 勾引 入かきひ也

ならふ 習効【翫】學

わらふ 咲笑【闇】豈

『あさふ 又・手』

になふ 荷【負】擔

よそふ 『よそひとも』 装【一束】

あまなふ 『和』甘【酣】

もらふ 餽【羅齋】『ロサチ』

そなふ 備具【饌】

うれふる 『うれへ』愁【患】『憂』

たふる 倒僵【外本定】『臥』顛

たふる 斃【踏】牛馬の『死たる』也

なふる 痿【陰也】『物のなれたる也』

かぞふれば 『數』算

ふりあふぐ 振仰

はふらさじ 『不』放埒【流離】

『ゆ』『い』ふかひなご 無云【甲斐】

たふごご 貴尊【尚崇】

『おほふ袖 覆袖』

けふのはそぬの 狹布【セハン】『細布』

あまふる 甘辛【甘苦】

あふる 壺【罍】

ゆまかふ空のかよひち 行違【空】通路

『春の鶯さへづりまふ程 春鶯【轉】舞程』

唯一本通トス

●五十二丁

一本、土中トス

はにふのこや 赤土小屋 万葉在之 あふくまがは 阿武隈川

あふさかやま 「逢」會 阪山 あふみのくに 近江國

みなもこのちたがふ 源順 古今作者

『おほふべき袖こそなけれ 可覆袖社無』

はふりこ 祝子 万葉有之 はふり 祝詞 祠官也

『き』『ま』ふに 急 をふしこうちのみつね 凡河内躬恒

『すまふ すまひ共 相撲』 『をこなふ 行』

『まじない給ふ 猶尋 遊仙窟』

三條西殿 前右大臣公條御輿書

寫本云

此一册、小僧紹巴、以數多之本考勘之、而舛謬猶有之、先哲言、按書如塵埃風葉、隨掃隨有云々、可俟後君子而已

天文廿一重陽前日記之 稱名野釋 御判

文安本奥書云

此双子、以證本不違一字書寫之、依左衛門尉藤原氏保所望、經年
月者也、眞實早筆之跡多憚

平常緣花押

一定家卿假名遣少々

端へ

なからへ 長久

いそへ 磯邊

うつろへ 衰

やへ 八重

さへつる 轉

かへて 鶏冠

かたへ 片邊

たへて 堪

たごへ 譬

あへず 不敬

まきたへ 敷妙

なそらへ 准據

うへて 植

いへ 家

うへ 上

そへ 副

かへる 歸

袖抜うちはへて 袖打總

いにしへ 古

まへ 前

●文明本四十四丁

のはへ 延

いへは言

さへ 副

ゆへ故

ひかへ 引

こたへ 答

よそへ 准

たくふへ 比

つかへ 仕

あつらへ 誂

はたへ 膚

中の曇 ぬ

きえ 消

たえて 絶

見え 見

えたる 得

きこえ 聞

もえ 萌

いりえ 入江

おのゝえ 鉞柄

ほえ 吠

えた 枝

こえて 越

ひえ 比叡

得不知

えひす 狄戎夷

えにあらは 縁

せうえう 逍遙

ふえ 笛

さえて 寒

えそあらぬ 得意也

奥のゑ

こゑ 聲

ゆくゑ 行末

すゑ 末

ゑひて 醉

ゑ 産穢

端のほ

ねほえ 覺

さかえ 榮

えならぬ 艶

えふの身 閻浮身

えらふ 撰

ゑ 繪

ゑふくろ 餌袋

つゑ 杖

こすゑ 楢

かきほ 垣面

さほ 竿

さほる 融

いはほ 巖

にほふ 匂

かほ 顔貞

さよのほる 調

中のを

をろか 愚疎

をこりて 驕

かた我なみ

をはり 終

我ち 遠

をそき 遅

をこ 音

をのつから 自

我のこ 男

をる 織

玉のを 命

をしてるや 押照哉
於穢泥屢戒

我く 置

をくれ 送

をうな 女

すさのを 素盞鳥

●四十五丁

をしなみ 押並

をきのゐて 爐カ

をは 人也・伯母

奥のカ

おほん 御

おそろく 驚

おふる 生

おや 親

れしむ 惜

おごる 減

おく 奥

名にしおふ 名負

山れろし 山下風

深山をろしの時カを也

その 小野

をかへ 岡邊

をし鳥 鴛

おもふ 思

れける 落

おほせ 仰

れき 荻

れなと 同

れほつかなき 覺東無

れほく 多

れして 春雨

あひをイおひ 相生

おき 奥沖

水のおも 水面

かめのね山 龜尾山

おさ 長

おりて 折

おはな 小花

岩きりこれし 岩切通路

おほかた 大方

端のい

いかき 社瑞離

たい 臺

ちいささ 小少

おほゆ 覺

おのへ 尾上

れくて田 晩田

れごろへ 衰

れきふと 起居伏

れふのうら 麻生浦

れりはへ 下榮

れい 老

おそこ 男

きやうたい 鏡臺

かい 榜 舟也

おい 老

●四十六

もちい 餅

きさいのみや 后宮

中のね

雲る

ゑるて 強

よる 宵

山の井

つるに 終・遂

井の水

たちる 立居

まごる 迷

つる草ル

奥のひ

こひ 戀

おもひ 思

こよひ 今宵

くひ 悔

さふらひ 侍

たまらひ 魂

かひ 貝

ひろひ 拾

山のかひ

いはひ 祝

たごひ 假・縱

うつろひ 衰

やよひ 三月

なご 繩

いと 岩

あひた 間・際

よはひ 齡

そこなひ 心地

あご 水の泡

あご雪 淡雪

一人丸秘鈔 和歌文字間事

一緒之音ちりぬるを書之依緒用之

をみなへと

をこは山

をくら山

玉のを

をさよ

をたえのはと

茂く露

てになほの
詞のなほの
字

茂やみ

まつを 夏狩人

をこめ

一尾之音うねの奥山書之故也

れく山

おほかた

れもふ

おとむ

れころく

おきのは

れのへの松

花茂おる

さつを松

●四十七

こきおりふと

おここ

こ枝おと 功融

おさ 箕 布也

れごうと 弟

おかしき

れかむ

一 え 枝 江 むめかえ 松かえ たちえ ほつえ ちつえ ぶ

え筒 たえ 断 きえ 消 こえ 越 さこえ 聞 見え 見 かせさえ

て 風寒 かえての木 鷓冠木 えやのいふきの いりえ 入江

一 へ うへきぬ たへす 不堪 ちろたへ 白妙 草木枝うへをく 植置

こと枝へて 年經 まへうしろ 前後 ここのゆへ 故 いへ 家

いろへ やへむくら 八重葎 やへさくら さへつる 鳥也 すへ

て 居 けふこゝのへに 九重 さなへ 早苗 こへ こたへ れも

へは なへに

一 点 する ゆくる ころ

こすゑ 葱 衛 葱んかのさ もの葱ん 葱のこ つ葱

一ひ こひ かひもなく いひ葱らぬ まひ人 まごひ かよ

ひ うひこそ おひぬれ おいぬれば又一説也 いさよひの月 あふ

ひ草 葱たひ

一ぬ あ井 藍 つるに 色にそいてぬへき はすのはる 池のは

る よ井のま 管間 よひ 又一説通用之 くれな井 紅 ふする 猪

一い いにへへ古 にこのたい かよみのたい 葱 てんかい

たい 題 れいぬれは 老 たひぬれは 又一説

い、本ノマ、

●四十八丁

文明十年二月八日書寫畢
以禁裏御本書之

按察使 藤原親長